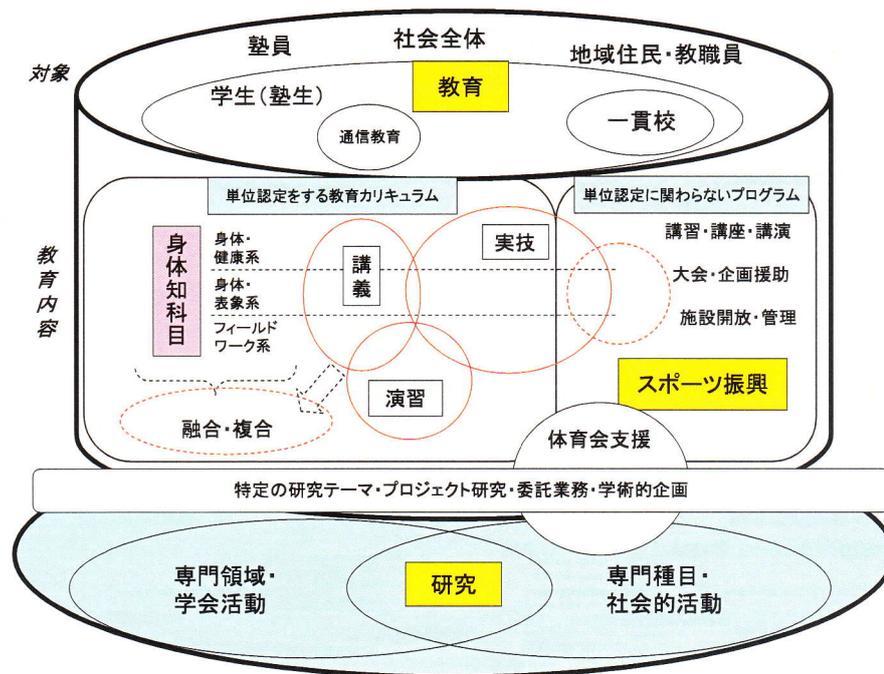


平成16年度 慶應義塾大学体育研究所 活動報告書

特集：平成16年度保健体育科目カリキュラム改定の全容



体育研究所の活動イメージ：カリキュラムワーキンググループ作成

目 次

巻 頭 言	1
I. 特集 平成16年度保健体育カリキュラム改定の全容	
1. カリキュラム改定にむけた検討作業過程	5
2. 新カリキュラムの骨子	6
3. 成績評価の方法	7
4. 授業評価アンケートの見直し	8
5. 履修の状況 (概要)	9
6. まとめ	10
II. 研究活動記録	
1. 個人研究業績・研究教育活動・研究助成	13
2. 所内定例研究会発表要旨	21
3. 浅野基金研究補助による研究成果報告	33
4. 特別研究期間	34
5. 大学体育連合中央研修会参加報告	34
III. 教育活動記録	
III-1. 授業の実施	
1. 平成16年度体育科目の履修者統計	39
2. 授業評価の実施	42
3. ビジュアルシラバスの実施	50
4. 通信教育部対象の保健体育科目	51
5. 新しい教養教育の実践	52
III-2. スポーツイベントの開催	
1. 塾長杯・塾内競技会	56
2. 公開講座 (他)	60
3. 所内施設の開放	62
IV. 業務活動記録	65

巻 頭 言

体 育 研 究 所

所 長 高 嶺 隆 二

平成16年度、体育研究所の設置科目（旧保健体育科目）は、新たな形でスタートしました。1949年の新制大学発足時に必修科目として本塾大学学部に設置されて以来50年余の間には数々の見直しを行って、その時々の学生のニーズに応じてきました。最も大きな改訂は1991年の大学設置基準の大綱化を受けて、1993年度から各学部が従来の必修科目としての保健体育科目を選択科目・自由科目と位置づけられ、 Semester制を採ったことでした。その後、今日に至る間にも絶えずあらゆる角度から見直しを行い改善してきました。

そうした流れの中で練り上げられた平成16年度カリキュラムは、特に科目の理念・意義を重視して従来とは異なった角度から検討を加えて立案され、学部に受け入れられて実施に移されました。これらの改訂に至る経緯については、本誌の「平成16年度保健体育カリキュラム改定の全容」として特集されておりますのでご覧ください。

改訂の内容を要約すると、第一に科目名「保健体育科目」を「体育科目」としたこと、第二に講義科目を従来の「保健衛生」「体育理論」という分類から「体育学講義」に一体化して半期2単位の科目として設置したこと、第三に実技科目を履修方法の違いによる「体育実技Ⅰ」「体育実技Ⅱ」としていたものから、評価方法の違いによる「体育実技A」「体育実技B」としたこと、第四に新たに理論と体現を目指した科目「体育学演習」を設置したことです。特筆すべきは、第三の改訂です。即ち体育実技科目の設置形態が評価方法をその設置理念に置かれたことです。「体育実技A」は、従来どおりA～D評価を行います、「体育実技B」では、その評価を「合格／不合格（Pass／Fail）」で表価すことにしたことです。

検討グループでは、評価基準の明確化、学部の学科目の評価との整合性をもたせるためには、評価方法（基準）はどうあるべきかの検討に勢力を注ぎ「体育実技A」を含め、評価項目（課題）を決めてそれを点数化する方式を取り入れ、実施に移されたものです。

これらの改革の評価は、数年の経過を待たねばなりません。そのために、研究所では1993年の改訂以来、毎年・学期ごとの学生による「授業評価アンケート」を実施して教育内容の充実に努力してきていますが、今年度のアンケートには新たにこれらの改革に関する質問項目を加え、今後も注意深い検証を継続することにしています。

体育研究所は、大学の教養教育の一端を担う機関としての責務を果たすべく、これからも体育科目の理念を深め、「身体知」としての体育のあり方を検討していくことが必要であると考えております。

本報告書について、皆様の忌憚のないご意見、ご助言を賜れば幸いと存じます。ご支援、ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

I. 特集

平成16年度保健体育科目カリキュラム改定の全容

概 要

平成16年度から体育研究所の開講する保健体育科目が改定された。このカリキュラム改定は教養教育の再編を視野に入れた全塾的な動向に先駆けて実施された。平成16年度の活動報告の中心的内容として特集した。

1. カリキュラム改定にむけた検討作業過程

1) 背景

平成16年度より保健体育科目の新カリキュラムが実施された。このカリキュラム改定作業のスタートは平成14年度秋にさかのぼる。当時、日吉キャンパスでは来往舎が完成し、教養研究センターが発進したところであった。平成3年の大学設置基準の大綱化により一般教育科目の選択化が進んだ中、大学における教養教育の再構築が新世紀を向かえて再び大きな課題であると認識された。また、これに先駆け、平成14年3月に教養教育研究会が「教養教育グランドデザイン—新たな知の創造—」（以下グランドデザインと称す）を高等教育における教育モデルとして提案し、その骨格となる「六つの知」すなわち、「言語知・身体知・複合知、文化知・社会知・科学知」による再編が示されていた。体育研究所においても、教養教育研究会のメンバーであり、教養研究センター所員としてこの問題に先導的役割を果たしてきた近藤明彦教授の指導のもと、「身体知」という部門を軸に、新たな教養教育へ積極的に貢献すべきという機運が高まっていた。そして、数年後に実施されるカリキュラム改定に合わせて、保健体育科目カリキュラムの見直しをスタートさせたのである。

カリキュラムの見直し作業は、近藤教授を中心にコアとなるメンバーが指名され、これに教育委員会メンバーを加えたワーキンググループを編成して進められた。平成15年度夏をめどに新カリキュラムを各学部提案するという目標設定で検討が始まった。

2) ワーキンググループにおける議論

当時の保健体育科目がおかれた状況 保健体育科目は、大学設置基準の大綱化に伴う各学部のカリキュラム改定に合わせた、平成5年度的大幅改定から10年余りの歳月を経ている。大綱化に伴い、長く1年生のみを対象と

していた必修科目から、選択・自由科目へと移行した。このため、当時は保健体育科目としての教育活動の大幅な縮小が生じることが懸念されていた。しかしながら、その一方で、セメスター制導入、履修学年・学部の制限解除、実技開講種目の多様化などの新たな取り組みを行い、試行錯誤を繰り返しながらも、年間の履修者数は延べ人数で8000人を越える規模を維持していた。つまり、必修時に比較しても、塾生への教育機会を一定規模で確保することが出来た。大綱化から10数年を経て、履修者の動向が安定した状況にあったとも言える。こうした中で、再びカリキュラム改定を進めることは、まさに体育研究所における保健体育科目の理念を問い直す機会となった。そのため、ワーキンググループにおける議論も多岐にわたり、新カリキュラム完成までの道のりは平坦なものではなかった。

当初、議論の柱とされたのは「保健体育科目全体をどのように捉え、どう改善するか」「実技科目に関して、(グランドデザイン照らし合わせて)そのカテゴリーをどう考えるか」というものであった。つまり、各学部によってカリキュラム制度の違いがあるが、研究所の考える「保健体育科目」を具体的に改善する上で、既存科目の枠組みを見直すことが議論された。さらにそこに、グランドデザインに提案された身体知科目の形態である「身体・健康系」「身体・表象系」「フィールドワーク系」といったカテゴリーを加味してみる、というものであった。そのため、既存の科目をいくつかのカテゴリーに分類し、実施形態(講義・演習、学部とのオムニバス)や評価方法・授業目的による特色づけ、等の観点で新たなカリキュラムへのアイデアが議論されていた。

体育研究所の行う教育活動は何か? こうした過程で、1つのアイデアが焦点となった。「単位認定にこだわらない教育も重要なのではないか」という投げかけである。つまり、

単位認定をするカリキュラムと単位認定に関わらないプログラムがすでに研究所に存在し、後者は「スポーツ振興」という名で塾内に推進されている。カリキュラムという枠組み中にこうした視点が入ってもいいのではないか、という新たな意見であった。これは、体育研究所の行う教育活動全体を見直す提言でもあった。事実、議論は体育研究所が塾内外に向けて実施する活動内容全体に及び、その全体をイメージした図式も作成された（表紙参照）。結果的にこのアイデアは、「カリキュラムは単位認定する内容を前提に作成する」という立場で議論から外れていくが、研究所として両者の教育活動を充実させるということを確認するものとなった。

Faculty Development の推進 また、この単位認定に関する議論により、多くのコマ数を占める実技科目の実情を考え直すという流れも生まれた。「成績評価の厳格化」である。体育実技科目の中には実体験・実践を通じて人間形成に寄与することをねらいとする側面が強い内容のものもある。例えば合宿を伴って野外活動体験をする「山岳」「アウトドアレクリエーション」、一般に体験機会が限定される「ヨット」「馬術」などである。こうした実技では、A・B・Cというグレードをつけた成績評価が実態にそぐわないことが指摘されてきた。そこでは、ある基準で個人間を比較するのではなく、共同生活や新たな文化的体験が重視されているのである。そこで、評価においてグレードをつけない「合否評価／Pass or Fail」の導入が検討されたのである。この問題には体育科目におけるいくつかの課題がリンクしており、単に成績評価だけの議論には留まらなかった。「合否判定があるならば、A・B・C評価の基準も再確認すべきである」「履修者側にも、何を目的にして何を評価される授業であるか認識させる必要がある」「体育科目としての共通認識を持って、担当教員まかせにならず、相互に観察し

合い自己評価し合う体制が必要である」等等、まさに Faculty Development の議論である。実際、こうした各授業の開講のねらいや特色づけを科目全体として管理して行くことは容易でなく、曖昧にされていた状況を改善するための議論が深まったことは意義のあることであった。

3) 新カリキュラム実施に向けた議論の収斂

ワーキンググループにおける議論も際限なく続けられるわけではなかった。平成15年度に入り、16年度実施に向けた現実的な改定作業が意識されていく。そこで、成績評価方法による実技科目の再編、講義の2単位化、新たな演習形式の授業開設という科目の枠組みの改定が方向付けられた。しかし、グランドデザインにある身体知・新たな知を意識した授業の開発という、言わばソフト面については十分に議論を尽くせなかった感がある。この点は、今後の各学部におけるカリキュラム改定の動向と合わせて考えてゆく必要もあり、研究所外とのコラボレーションの道を探る努力を続け、機が熟すのを待ちながら議論を重ねることとなった。

上記のような経緯で、平成15年夏、各学部へ新カリキュラムへの移行を申し入れてゆく運びとなった。幸い、各学部の理解が得られて、新カリキュラムは平成16年度からの実施が認められた。次項以降、その新カリキュラムの内容について示すこととする。

2. 新カリキュラムの骨子

1で述べた背景のもと、新カリキュラム「体育科目」は以下の目的を持つ科目とした。

体育科目は、「身体」に関わるさまざまな事象を自ら体験しながら理解し、社会における自己の存在を見つめ、人間を理解していくことをねらいとした総合科目である。特に、言語化された知識を超えて自己の身体が体験する「身体知」を理解し、獲得することで豊

かな人間形成を目指す。各開講科目には、このねらいを具体的にするさまざまなアプローチがあり、それぞれに細分化された目標が立

てられている。

体育科目は以下のような枠組みとなっている。

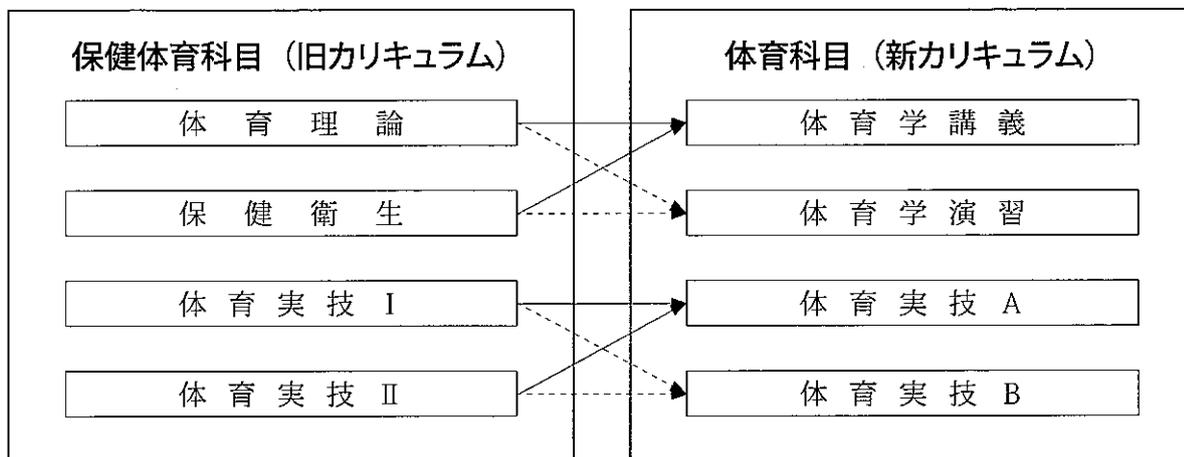


図 I - 1. 新旧カリキュラムの分類

1) 体育学講義

「身体」「運動」「健康」に関する講義で、従来の体育理論・保健衛生の内容を継承したものである。副題により担当教員の研究分野の専門性が生かされたさまざまな展開が期待できる。半期の講義科目であるため2単位として認定する。A～Dの成績判定を行う。

例) スポーツ心理学の世界、アスリートのためのスポーツ科学など8科目

2) 体育学演習

講義プラス実習による演習形式の授業で、より実践的な理解をねらいとする。半期で1単位、A～Dの成績判定を行う。

例) ライフセービング、自然体験活動演習など4科目

3) 体育実技 A

従来の体育実技 I・IIを継承したもので、スポーツ・エクササイズの実践を行う。評価基準を明確にした上で、A～Dの成績判定を行う(評価方法については後述)。実施時期によって以下の2つに分類される。

①ウィークリースポーツ

週1回実施の授業。

例) サッカー、アーチェリーなど31種目

②シーズンスポーツ

夏季・秋季休業中の7日間、または3泊4日程度の合宿形式の授業。

例) 少林寺拳法、器械体操など7種目

4) 体育実技 B

スポーツ・エクササイズの実践を行う。合格の基準を明確にした上で、合否(pass/fail)成績判定を行う(評価方法については後述)。

①ウィークリースポーツ

週1回実施の授業。平成16年度はバレーボールのみ開講。

②シーズンスポーツ

夏季・秋季休業中の7日間、または3泊4日程度の合宿形式の授業。

例) 馬術、スキーなど7種目

3. 成績評価の方法

平成15年度までは、体育実技の評価はすべて、A・B・C・Dの4段階で評価していた。

平成16年度は、その方法を踏襲する体育実技 A と、合否のみを判定 (Pass または Fail) する体育実技 B の 2 つを設定した。また体育実技 A では、出席、技術、態度、理解の観点から点数をつけ、その点数をもとに A ~ D を決定するという方法にした。体育実技 A も B も、成績評価の根拠をしっかりと持つという点で共通しており、この「成績評価の根拠」が平成16年度に成績評価を変更した際に最も重視した点である。

体育実技 A では、まず A ~ D の点数区分を定義した。すなわち、A が何点以上、B が何点から何点、という区分である。次に、100点満点中、出席点を60点、技術点、態度点、理解点の小計を40点とし、この40点の配分は各教員が選べるようにした。例えばある教員は、技術点30点、態度点10点、理解点0点という配分を選び、また別の教員は技術点0点、態度点20点、理解点20点という配分を選ぶことができる、ということである。この配分を、各教員がガイダンスウィーク (学生が授業を履修登録する前の期間) に学生に公表し、説明することにより、学生は履修登録前にその授業の成績評価について知ることができる。履修登録前に授業内容を知ることが学生にとって重要であり、その「授業内容」には成績評価のことも含むべきである、というのが平成16年度の体育研究所の姿勢である。

体育実技 B では、各教員がまず、到達すべき明確な基準 (一つ又は複数の項目で構成) を設定する。例えば、「目標スキルの獲得」という項目と、「授業回数のうちの 80% 以上の出席」という項目を設置し、それら両方の項目を満たした学生が 'Pass' (合格)、そうでない学生は 'Fail' (不合格) となる。A ~ D 方式でないこの評価方法は、現在理工学部で単位認定されていないこともあり、体育実技 B を履修する学生はやや少なかったが、この方法に賛同する教員も少なからずおり、今後も体育実技の評価方法として視野にいれ

るべきであろう。

4. 授業評価アンケートの見直し

体育実技履修者アンケートは平成5年度より大学教員の資質開発 (授業内容、方法改善・向上) を目指して行なわれてきた。この12年間、幾度か質問項目の変更が行なわれてきたが、授業評価アンケート全般の大きな見直しは行なわれていなかった。

今回、平成16年度からのカリキュラム改定をきっかけに、授業評価アンケートも今まで以上に学生の意見を授業に反映できるようなスタイルにすることが必要と考え、大きな見直しを行なうことになった。①配布回収方法、②質問項目、③自由記述の3点において変更を行った。

- ① 配布回収方法については、これまで教員が配布・回収を行なってきたが、学生の回答内容にも影響があると考え、学生による配布・回収を行なうことに変更した。
- ② 質問項目については、今までの質問項目に「教員の話は聞き取りやすかった。」「このクラスの雰囲気は良好であった。」といった項目が追加された。また、今回から講義、演習履修者にもアンケートを実施することになり、講義・演習履修者には「この授業では配布資料やプレゼンテーションが適切であった」といった質問が追加された。
- ③ 自由記述については、より学生たちの意見を聞きたいということで、自由記述のスペースを多くとった。今までの自由記述は「履修手続き、授業内容、教員、教授法、施設など意見があったら項目を挙げて書いてください。」と 2、3 行のスペースを空けていただけだったが、新しいアンケート用紙では、細かく項目立てをし、アンケート用紙の裏のスペースを全て使い、「授業内容について」、「教員について」、「施設および機器・用具について」の3つの項目において、「よかったこと」、「改善すること」

に分けて書いてもらい、最後に体育科目全般に関する意見および提案を記述してもらえるように多くのスペースをとった。

今後も体育実技履修者アンケートを行なうことにより、学生たちの多くの意見を反映し、充実した授業ができるようにすることが大切であると考えている。

5. 履修の状況 (概要)

ここでは、新カリキュラム施行に伴う履修者数の動向を概観する。なお、詳細の統計は、「Ⅲ-1. 授業の実施」を参照されたい。

1) 講義系科目

表 I-1 は講義系科目の履修者を旧カリキュラム、新カリキュラムで比較したものである。

表 I-1. 講義系科目のコマ数・履修者数の比較

	名称	コマ数	履修者数
平成15年度	体育理論	10	226
	保健衛生	3	78
	計	13	304
平成16年度	体育学講義	8	236
	体育学演習	3	56
	計	11	292

カリキュラム改定に伴い、体育学講義が半期で2単位となったため、履修者の増加を見込んでいたが、若干の増加にとどまった。講義を2単位化した影響については、今後数年にわたり動向を見守る必要があるが、学生が興味を持つテーマの選択など、科目の内容も精選していく必要がある。

新科目となった体育学演習は、定員75名に対し56名の履修者があった。講義と実習を組み合わせた授業であることから、教養教育グラウンドデザインの中で示された「身体知」へのアプローチの方法として有効な科目であると考えられ、更なる科目数の増加が望まれる。

2) 実技系科目

表 I-2 は実技系科目の履修者を旧カリキュラム、新カリキュラムで比較したものである。

カリキュラム改定と共に、授業の開講コマ数の調整も行った。具体的にはここ数年履修者の減少が目立っていた体育実技Ⅱを体育実技A（ウィークリースポーツ）へ移行し、定員の適正化をはかった。

全体としては、平成15年度（旧カリキュラム）の定員に対する充足率77.2%に対し、平成16年度（新カリキュラム）の定員に対する

表 I-2. 実技系科目のコマ数・履修者数の比較

	名称	コマ数	定員	登録数 (抽選前)	倍率	履修者数	充足率
平成15年度	体育実技Ⅰ	312	8498	7419	0.87	6876	80.9%
	体育実技Ⅱ	23	1226	543	0.44	631	51.5%
	計	335	9724	7962	0.82	7507	77.2%
平成16年度	体育実技A	311	8432	7533	0.89	6958	82.5%
	体育実技B	17	770	396	0.51	442	57.4%
	計	328	9202	7929	0.86	7400	80.4%
	シーズンA	7	250	185	0.74	191	76.4%
	シーズンB	7	410	210	0.51	224	54.6%
	シーズン計	14	660	395	0.6	415	62.9%

※シーズンスポーツは内数

充足率80.4%と、全体ではカリキュラム改定の影響は少なく、例年通りの履修者数となった。

しかし、ウィークリー・シーズン種目とも体育実技Bの充足率が体育実技Bに比べて低かった。これは、理工学部が自由科目のみの履修となったこと、グレードのない成績評価に関するまどい等が原因として考えられる。

今回のカリキュラム改定は、明確な基準による成績評価という内容も含まれており、履修者数の動向を注意深く見守っていく必要がある。

6. まとめ

大学設置基準の大綱化に伴う各学部のカリキュラム改定に合わせた大幅改定から10年以上の年月が経った。平成16年度から、これまでの「保健体育科目」を「体育科目」と名称変更、それに伴いこれまでの内容も変えるべきところは変え新カリキュラムで実施し始めた。この変えるべき必要性については、冒頭のその「背景」となる部分で述べた。

その内容の変化した主な点を集約すると、
①「成績評価」：これまでのA・B・C評価に加え、合否評価／Pass or Failの導入であり、またこれ等の評価方法についてその根拠となるものが何であるか、履修者に理解できる形として表した。
②「新設置科目」：従来の体育理論、保健衛生の科目を再編、体育学講義とし、これ等を2単位とした。また、新たに講義プラス実習による体育学演習を開設した。
③「授業評価のアンケート」：これまで教員の資質開発の目的でこのアンケートを実施してきた。16年度の改定をきっかけに、これまで以上に学生の意見が授業に反映できるようその実施方法、内容について変更した。「成績評価」「新設置科目」等の改定を実施前年度から各学部に説明をし、協力をお願いしてきたわけであるが、幸いに皆様方のご理解のお陰で16年度から実施することができた。

大きな混乱もなく実施年度を終了できたが、これからも学生にとって「体育科目」として何が必要か、そのことを更に考えたい。

II. 研究活動記録

1. 個人研究業績・教育業績・研究助成

高嶺隆二（教授）

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

横浜水泳協会 会長、通年
横浜市体育協会 理事兼特別委員会委員長、～04.3
横浜市体育協会理事兼市民スポーツ委員会委員長、04.4～
慶應義塾大学公開講座 中高年のための水泳教室 講師、2004.6-7
神奈川県体育協生涯スポーツ委員会委員、04.4～

近藤 明彦（教授）

論文・報告書

市村操一、近藤明彦：「散歩」という言葉のはじまりと明治時代の散歩者たち、東京成徳大学研究紀要、11、91-102、2004

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

文部科学省学術フロンティア「超表象デジタル研究センター」プロジェクト「文化としてのウォーキング」研究代表者、通年
国際スポーツ心理学会 理事、通年
日本スポーツ心理学会 理事、通年

安藤 勝英（教授）

論文・報告書

森本和利、阿久根英明、安藤勝英：姿勢と歪みに関する研究—左右脚長差が身体に及ぼす影響について—、西南学院大学教育福祉論文、4（2）、2005.2

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

塾体育会柔道部 師範、通年
東京学生柔道連盟 理事、通年

佐々木玲子（教授）

論文・報告書

佐々木玲子：グリップ動作を用いた子どもの一側単独・両側同時反応時間特性、慶應義塾大学体育研究所紀要、44（1）、17-23、2005.1

依田珠江、佐々木玲子：女子大学生の日常生活状況の実態調査、慶應義塾大学体育研究所紀要、44（1）、1-7、2005.1

吉田泰将、植田史生、福本修司、佐々木玲子、村山光義、望月康司：剣道における指導内容の相違による正面素振りの変化—振り上げ最高時の剣先位置の指導法について—、慶應義塾大学体育研究所紀要、44（1）、35-42、2005.1

佐々木玲子：けんけんとび～ホップ系リズム動作の発達～、子どもと発育発達、2（6）、403-405、2005.2

学会発表等

小林ゆい、佐々木玲子：狂言の舞演技中における動作と呼吸パターンの関係—大蔵流『三番三（三番叟）』を事例として—、第55回日本体育学会、大会号、P326、2004.9

清水静代、村岡慈歩、大森芙美子、西田ますみ、佐々木玲子、加賀谷淳子：幼児期における身体発達、身体活動量および運動能力の関係、第55回日本体育学会、大会号、396、2004.9

Y Kobayashi, R Sasaki: Relationship between basic movements and respiration patterns in Kyogen, The 14th Annual meeting of the International Association for Dance Medicine & Science, PROCEEDINGS, 295-296, 2004.10

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

プロスポーツ有効活用事業・研修会講師、2004.10

文部科学省委嘱 子どもの体力向上キャンペーン事業におけるキャンペーンソング&ダンスの制作・普及のためのプロジェクトメンバー、2004.8-2005.3

日本発育発達学会「子どもと発育発達」編集委員、通年

日本バイオメカニクス学会「バイオメカニクス研究」編集委員、通年

社団法人 全国大学体育連合将来検討特別委員会 委員、2004.10-

比較舞踊学会 理事、通年

本物に触れる、頭と身体で学ぶ伝統芸能（演習）授業：体験教室一本物に触れる、頭と身体で学ぶ伝統芸能一、平成16年度日吉キャンパス「予算管理部門内調整費」慶應義塾大学教養研究センター企画「新しい教養教育の支援」事業 企画運営及び講師、2004.9-12

研究助成等

上肢の一側単独および両側同時反応時間からみた動作制御能の発達、科学研究費補助金（文部科学省・日本学術振興会）（基盤研究C）、60万円

反応時間課題における子どもの両側性機能低下特性とその経年的変化、慶應義塾学事振興資金（個人研究）、20万円

本物に触れる、頭と身体で学ぶ伝統芸能（演習）授業：体験教室一本物に触れる、頭と身体で学ぶ伝統芸能一、平成16年度日吉キャンパス「予算管理部門内調整費」慶應義塾大学教養研究センター企画「新しい教養教育の支援」事業 共同、80万円

当年中の研究教育活動の概要

1. プロスポーツ有効活用事業・研修会講師「発育発達期とスポーツ」：2004.10.2、東京スポーツ文化館
2. 子どもの体力向上キャンペーン事業におけるキャンペーンソング&ダンスの制作・普及のためのプロジェクトメンバー：2004.8-2005.3
3. 慶應義塾大学教養研究センター企画「新しい教養教育の支援」採択事業「本物に触れる、頭と身体で学ぶ伝統芸能（演習）授業の企画運営及び講師：2004.9-12

植田史生（教授）

論文・報告書

植田史生、福本修二、吉田泰将、石手靖、望月康司、大嶽真人：剣道における心理的競技能力調査について、慶應義塾大学体育研究所紀要、44（1）、25-34、2005.1.

吉田泰将、植田史生、福本修二、佐々木玲子、村山光義、望月康司：剣道における指導内容の相違による正面素振りの変化—振り上げ最高時の剣先位置の指導法について—、慶應義塾大学体育研究所紀要、44（1）、35-42、2005.1

学会発表等

大嶽真人、石手 靖、依田珠江、植田史生、長谷川望：学生のスポーツ活動に対する意識・実践について—その2—、第55回日本体育学会大会、大会号、514、2004.9

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

南ドイツ剣道連盟 春季稽古会 剣道講師、2004.3

ハーヴァード大学剣道部 剣道合宿 剣道ヘッドコーチ、2004.4

第44回全国教職員剣道大会 審判副主任、2004.8

第8回日本レーザー・スポーツ医学会学術集会 教育講演、「剣道における気の病」、2004.12

綿田博人（教授）

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

マルチメディア慶友会 講師派遣、テーマ「早慶戦の歴史」、2004.12

第77回選抜高等学校野球大会 慶應義塾高等学校硬式野球部 臨時コーチ、2005.2~3

松田雅之（助教授）

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

関東学生陸上競技連盟 評議員（総務委員、表彰委員、ドーピング対策委員）、通年
特定非営利活動法人横浜スポーツ科学研究会 代表幹事、通年
慶應義塾大学公開講座 健康ジョギング教室 講師、2004.10-11
マルチメディア慶友会 講師派遣、テーマ「オリンピックとスポーツ」、2004.11

石手 靖（助教授）

論文・報告書

植田史生、福本修二、吉田泰将、石手 靖、望月康司、大嶽真人：剣道における心理的競技能力調査について、慶應義塾大学体育研究所紀要、44（1）、25-33、2005.1

学会発表等

大嶽真人、石手 靖、依田珠江、植田史生、長谷川望：学生のスポーツ活動に対する意識・実践について—その2—、第55回日本体育学会大会、大会号、514、2004.9

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

スポーツと自然を通じた教養教育の実践、平成16年度日吉キャンパス「予算管理部門内調整費」慶應義塾大学教養研究センター企画「新しい教養教育の支援」事業 企画運営及び講師、2004.8-9

第8回日本レーザー・スポーツ医学会学術集会 大会長講演「第8回日本レーザー・スポーツ医学会学術集会を迎えて」、2004.12

学生総合センター「大学生生活懇談会」主催「第19回スキーのつどい」 スキー指導講師、2005.2

研究助成等

スポーツと自然を通じた教養教育の実践、平成16年度日吉キャンパス「予算管理部門内調整費」大学教養研究センター企画「新しい教養教育の支援」事業 事業代表者、40万円

村山光義（助教授）

論文・報告書

M Murayama, T Yoneda, S Kawai: Muscle tension dynamics of isolated frog muscle with application of perpendicular distortion, European Journal Applied Physiology, 93(4), 489-495, 2005.1

吉田泰将、植田史生、福本修二、佐々木玲子、村山光義、望月康司：剣道における指導内容の相違による正面素振りの変化—振り上げ最高時の剣先位置の指導法について—、慶應義塾大学体育研究所紀要、44(1)、35-42、2005.1

村山光義：筋硬度変化の生理学的要因に関する研究—筋硬度計測の意義—、順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科博士論文、2005.3

学会発表等

佐々木亮、米田継武、村山光義：随意運動が後続する反射性筋活動の性質について、第81回日本生理学会、Jpn J Physiol, 54(S), 186, 2004.6

村山光義、大杉健司、内山孝憲、米田継武、河合祥雄：高強度までの随意的筋収縮における筋硬度の変化、第12回日本運動生理学会、Advance in Exercise & Sports Physiology, 10, 128, 2004.7

佐々木亮、米田継武、村山光義：運動の準備と長潜時伸張反射の消長、第12回日本運動生理学会、Advance in Exercise & Sports Physiology, 10, 134, 2004.7

村山光義、米田継武、河合祥雄：一過性疲労運動後の筋硬度と血流量の関係、第59回日本体力医学会、体力科学、53(6)、669、2004.9

T Uchiyama, K Ohsugi, M Murayama: Relationship between muscle hardness estimated by the indentation method and muscle contractile level, 26th Annual international conference of the IEEE EMBS, proceedings, 2290-2291, 2004.9

大杉健司、内山孝憲、村山光義：押し込み反力計測による筋の粘弾性特性、第25回日本バイオメカニズム学術講演会、第25回日本バイオメカニズム学術講演会講演集、55-56、2004. 10

研究助成等

筋の硬さ変化の生理学的要因の検討、慶應義塾特別研究費、50万円

循環要因が筋疲労時の筋硬度変化に及ぼす影響、科学研究費補助金（文部科学省・日本学術振興会）（若手研究B）、240万円

当年中の研究教育活動の概要

平成16年度中は、塾特別研究期間を取得し、「筋硬度の生理学的要因の解明」に関する研究に集中的に取り組んだ。ヒトおよび摘出筋を用いたモデル実験により、筋硬度変化を生ずる生理学的要因として「筋線維自体の構造的変化による筋張力変化」と「循環変動による組織容積変化」を確認することが出来た。また、本成果を基礎に博士論文を提出することが出来た。

山内 賢（専任講師）

学会発表等

山内 賢、浮田咲子、金井茂夫、音海紀一郎、渡邊隼二、武藤三千代、市河勉、萩田亮、平田大輔：カンボジア・シュリムアップ州の青少年における生活習慣と体力の関係（その2）一足型と体力について一、日本体育学会第55回大会、大会号、488、2004. 9

浮田咲子、山内 賢、金井茂夫、音海紀一郎、渡邊隼二、武藤三千代、市河勉、萩田亮、平田大輔：カンボジア・シュリムアップ州の青少年における生活習慣と体力の関係（その1）一足型の調査結果報告一、日本体育学会第55回大会、大会号、487、2004. 9

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

日本運動・スポーツ科学学会 常任理事、通年

日本体育学会体育方法分科会 世話人、通年

吉田泰将（専任講師）

論文・報告書

吉田泰将、植田史生、福本修二、佐々木玲子、村山光義、望月康司：剣道における指導内容の相違による正面素振りの変化—振り上げ最高時の剣先位置の指導法について—、慶應義塾大学体育研究所紀要、44（1）、35-42、2005. 1

植田史生、福本修二、吉田泰将、石手靖、望月康司、大嶽真人：剣道における心理的競技能力調査について、慶應義塾大学体育研究所紀要、44（1）、25-34、2005. 1

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

全日本学生剣道連盟総務委員会 委員、2004. 10～

関東学生剣道連盟将来構想委員会 委員、通年

慶應義塾体育会剣道部（三田剣友会） 助教、2005. 3～

慶應義塾大学医学部剣道部 師範代行、2004. 10～

連載 徹底教授 中野八十二の上達秘訣（実技モデル）月刊剣道時代、2005. 2～

加藤大仁（専任講師）

学会発表等

加藤大仁：スポーツ政策研究に関する一考察、日本運動・スポーツ科学学会第11回大会、2004. 6

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

Pete Newell's Tall Women's Camp コーチング・スタッフ、2004. 6～7

研究助成等

スポーツ政策に関する基礎的研究、慶應義塾学事振興資金（個人研究）、10万円

野口和行（専任講師）

学会発表等

野口和行、池畑亜由美、長谷川望：キャンプにおける感情の変化—プログラムとグループ内の相互作用に着目して—、日本野外教育学会第7回大会、抄録集、7（1）、100-101、2004.6

池畑亜由美、長谷川望、野口和行、井上忠夫：キャンプにおける感情の変化、第8回日本キャンプ会議、抄録集、8（1）、14-18、2004.5

長谷川望、池畑亜由美、野口和行、小坪昭仁、井上忠夫：既知集団の親和に及ぼすキャンプの影響、日本体育学会第55回大会、大会号、221、2004.10

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

（社）日本キャンプ協会 専門委員、通年

（財）日本教育科学研究所 研究員、通年

大学スケート研究会 常任理事、通年

（財）日本教育科学研究所アウトドアゲーム指導法講習会 講師、2004.11

（社）日本キャンプ協会キャンプディレクター1級養成講習会 講師、2004.11

国立オリンピック記念青少年総合センター主催事業 青少年教育実践 e-研修自然体験活動実践事例講座 講師、2004.11

スポーツと自然を通じた教養教育の実践、平成16年度日吉キャンパス「予算管理部門内調整費」慶應義塾大学教養研究センター企画「新しい教養教育の支援」事業 講師、2004. 8-9

研究助成等

スポーツと自然を通じた教養教育の実践、平成16年度日吉キャンパス「予算管理部門内調整費」慶應義塾大学教養研究センター企画「新しい教養教育の支援」事業 共同、40万円

当年中の研究教育活動の概要

昨年度からキャンプ中に生起する感情の変化がキャンプの効果にどのような変化を及ぼすかに関する研究を行っている。平成16年度は共同研究者と共に以上の学会発表を行った。また、自然体験活動の企画に関わる e-Learning の立ち上げに関わった。

須田芳正（専任講師）

著書

須田芳正、宮崎昇作：やってみよう！フットサル、東洋館出版、2004.6

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

NHK テレビスポーツ教室「フットサル技術編」講師、2004.11

慶應義塾体育会サッカー部 監督、通年

村松 憲（助手）

論文・報告書

T Muraoka, T Muramatsu, T Fukunaga, H Kanehisa : Geometric and elastic properties of in vivo human Achilles tendon in young adults, Cells Tissues Organs, 178 (4), 197-203, 2004

T Muraoka, T Muramatsu, D Takeshita, H Kanehisa, T Fukunaga : Estimation of passive ankle joint moment during standing and walking, Journal of Applied Biomechanics, 21 (1), 72-84, 2005

小屋菜穂子、野田達也、村松 憲、高橋仁大、岩嶋孝夫、梅林薫：テニス競技のゲームにおける世界と日本のトップジュニア選手の比較、スポーツ運動学研究、17、93-105、2004.12

学会発表等

村松 憲、岩嶋孝夫、高橋仁大、野田達也、小屋菜穂子、梅林薫：日本ジュニアテニス選手の技能および戦術に関する研究、第2回 JISS 国際スポーツ科学会議2004、2004.12

村岡哲郎、千野謙太郎、村松 憲、福永哲夫、金久博昭：ヒト生体における筋線維の受動的力学特性、第43回日本エム・イー学会大会、2004.5

小屋菜穂子、野田達也、村松 憲、高橋仁大、岩嶋孝夫、梅林薫：テニス競技のゲームにおける世界と日本のトップジュニア選手の比較、第55回日本体育学会大会、大会号、495、2004.9

村岡哲郎、村松 憲、福永哲夫、金久博昭：大学剣道選手におけるアキレス腱の力学的特性の左右差、第55回日本体育学会大会、大会号、313、2004.9

岩嶋孝夫、梅林薫、野田達也、村松 憲、高橋仁大、野田達也、小屋菜穂子：14才以下男子世界トップテニス選手のサービスゲームに関する一考察、第55回日本体育学会大会、大会号、531、2004.9

高橋仁大、村松 憲、野田達也、小屋菜穂子、岩嶋孝夫、梅林薫：テニスにおける世界トップ選手と世界トップジュニア選手のゲーム内容の比較、第55回日本体育学会大会、大会号、532、2004.9

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(財)日本オリンピック委員会 強化スタッフ(医・科学スタッフ)、2004.4～

(財)日本テニス協会 強化本部スポーツ科学委員、2004.4～

放送大学「身体福祉論」第13回「テニス」実技指導員、通年

西東京市 障害者スポーツ指導者養成講座 講師「スポーツ生理学」、2004.6.23

全日本ランキング1位(テニス、35歳以上シングルス)、2004.1～7

研究助成等

ヒト身体運動中のアキレス腱伸張率の算出、科学研究費補助金(文部科学省・日本学術振興会)(若手研究B)、120万円

平田大輔 (助手)

著書

北川吉明、平川卓弘、吉川和孝、田所光男、上田敏之、高島朋子、平田大輔、須田和也、西條修光：バドミントン教本 ジュニア編、(財)日本バドミントン協会編、ベースボールマガジン社、2004.6

論文・報告書

平田大輔、田中伸明、須田和也、佐藤雅幸、西條修光：テニス選手における精神力の構造 - 性、経験年数、競技レベルによる比較 -、テニスの科学、13、43-52、2005.3

学会発表等

平田大輔、須田和也、佐々木宏児、田中伸明、佐藤雅幸、西條修光：大学テニス選手における精神力の構造について、日本体育学会第55回大会、大会号、494、2004.9

浮田咲子、山内 賢、金井茂夫、音海紀一郎、渡邊隼二、武藤三千代、市河勉、萩田亮、平田大輔：カンボジア・シュリムアップ州の青少年における生活習慣と体力の関係(その1) - 足型の調査結果報告 -、日本体育学会第55回大会、大会号、487、2004.9

山内 賢、浮田咲子、金井茂夫、音海紀一郎、渡邊隼二、武藤三千代、市河勉、萩田亮、平田大輔：カンボジア・シュリムアップ州の青少年における生活習慣と体力の関係(その2) - 足型と体力について -、日本体育学会第55回大会、大会号、488、2004.9

田中伸明、佐藤雅幸、澁谷隆良、水野忠和、高橋正則、平田大輔：ATP TOP100 にみる日本人の可能性、第16回テニス学会、2004.10

平田大輔、田中伸明、須田和也、佐藤雅幸、西條修光：テニス選手における精神力テストの開発について - DIPCA 及び実力発揮の自己認知との関連 -、日本スポーツ心理学会第31回大会、109-110、2004.12

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

日本テニス協会強化本部スポーツ医科学委員会サポート部会・部会員、通年

日本運動・スポーツ科学学会 評議員、通年

日本テニス学会 運営委員、通年

日本体操協会 アンチドーピング・医科学委員会・委員、通年

明治学院大学 非常勤講師、通年

女子栄養大学短期大学部テニス実習 講師、2003.7

女子栄養大学短期大学部スキー実習 講師、2004.2

スポーツと自然を通じた教養教育の実践、平成16年度日吉キャンパス「予算管理部門内調整費」慶應義塾大学教養研究センター企画「新しい教養教育の支援」事業 講師、2004. 8-9

研究助成等

テニス選手に対する心理テストの妥当性検討ー構成概念妥当性および因子妥当性の検討ー、慶應義塾学事振興資金（個人研究）、20万円

スポーツと自然を通じた教養教育の実践、平成16年度日吉キャンパス「予算管理部門内調整費」慶應義塾大学教養研究センター企画「新しい教養教育の支援」事業 共同、40万円

依田珠江（助手）

論文・報告書

依田珠江、佐々木玲子：女子大学生の日常生活状況の実態調査、慶應義塾大学体育研究所紀要、44（1）、2005.1

学会発表等

依田珠江、LI Crawshaw、斉藤久美子、中村真由美、小西あき、永島計、内田直、彼末一之：体温調節に対するアルコールの影響、第81回日本生理学会大会、Jpn J Physiol、54（S）、230、2004.6

安松幹展、宮城修、大橋二郎、戸莉晴彦、長谷川博、石崎聡之、依田珠江、田中秀登：サッカーのパフォーマンスに対するハーフタイム時の体冷却の効果、第59回日本体力医学会大会、体力科学、53（6）、799、2004.9

古賀初、大嶽真人、須田芳正、依田珠江、吉村雅文、越山賢一：大学生サッカー選手の心理的競技能力ー日本ユニバーシアード代表選手と韓国ユニバーシアード代表選手との比較ー、第55回日本体育学会大会、大会号、493、2004.9

大嶽真人、石手 靖、依田珠江、植田史生、長谷川望：学生のスポーツ活動に対する意識・実践についてーその2ー、第55回日本体育学会大会、大会号、514、2004.9

T Yoda, LI Crawshaw, K Saito, M Nakamura, A Konishi, K Nagashima, S Uchida, K Kanosue : Effects of alcohol on thermoregulation in humans, Symposium of the Physiology and Pharmacology of Thermal Biology and Temperature Regulation, 2004.10

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

スポーツと自然を通じた教養教育の実践、平成16年度日吉キャンパス「予算管理部門内調整費」慶應義塾大学教養研究センター企画「新しい教養教育の支援」事業 講師、2004. 8-9

研究助成等

アルコールの体温調節に対する影響、慶應義塾学事振興資金（個人研究）、20万円

スポーツと自然を通じた教養教育の実践、平成16年度日吉キャンパス「予算管理部門内調整費」慶應義塾大学教養研究センター企画「新しい教養教育の支援」事業 共同、40万円

小林ゆい（助手）

学会発表等

小林ゆい、佐々木玲子：狂言の舞演技中における動作と呼吸パターンの関係ー大蔵流『三番三（三番叟）』を事例としてー、第55回日本体育学会大会、大会号、326、2004.9

Y Kobayashi, R Sasaki : Relationship between basic movements and respiration patterns in Kyogen, The 14th Annual meeting of the International Association for Dance Medicine & Science, PROCEEDINGS, 295-296, 2004.10

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

慶應義塾大学公開講座 健康エアロビクス教室 講師、2004.5-7、10-12.

比較舞踊学会 理事、通年

特定非営利活動法人 日本伝統芸能教育普及協会<むすびの会> 事務局長、通年

本物に触れる、頭と身体で学ぶ伝統芸能（演習）授業：体験教室—本物に触れる、頭と身体で学ぶ伝統芸能—、平成16年度日吉キャンパス「予算管理部門内調整費」慶應義塾大学教養研究センター企画「新しい教養教育の支援」事業 企画運営及び講師、2004.9-12

研究助成等

伝統芸能における身体づかいに関する研究—日本の伝統芸能の基本的動作について—、科学研究費補助金（文部科学省・日本学術振興会）（若手研究B）、170万円、

伝統芸能における身体づかいに関する研究—舞と踊りの相違について—、慶應義塾学事振興資金（個人研究）、20万円

本物に触れる、頭と身体で学ぶ伝統芸能（演習）授業：体験教室—本物に触れる、頭と身体で学ぶ伝統芸能—、平成16年度日吉キャンパス「予算管理部門内調整費」慶應義塾大学教養研究センター企画「新しい教養教育の支援」事業 事業代表者、80万円

当年中の研究教育活動の概要

1. 慶應義塾大学教養研究センター企画「新しい教養教育の支援」採択事業「本物に触れる、頭と身体で学ぶ伝統芸能（演習）授業の企画運営及び講師：2004.9-12

西村 忍（助手）

著書

西村 忍：テーピングの現場と器具類、実践すぐにできるテーピングマニュアル、全日本病院出版、pp11-18、2005.3

論文・報告書

西村 忍、中里浩一、中嶋寛之：The Relationships of Ankle Ligamentous Injuries with Physical and Positional Characteristics in College Football Players、体力科学 53 (3)、281-292、2004

西村 忍、中里浩一、中嶋寛之：アメリカンフットボール競技中に発生した損傷に関する研究—大学生チームと社会人チームを比較して—、慶應義塾大学体育研究所紀要、44 (1)、9-15、2005.1

西村 忍：A Study of Ankle Ligamentous Injuries in College Football Players、日本体育大学大学院博士論文、2005.3

学会発表等

清水美樹、西村 忍、岩噌弘志、千葉吟子、中里浩一、中嶋寛之：大学女子チアリーディングにおけるポジション別損傷比較とその身体特性との関係、第59回日本体力医学会大会、体力科学、53 (6)、874、2004.9

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

慶應義塾体育会アメリカンフットボール部ユニコーンズ ヘッドトレーナー、2005.2~

研究助成等

体育実技クラス履修者における関節弛緩性テストと筋腱柔軟性テストの導入について、慶應義塾学事振興資金（個人研究）、20万円

2. 所内定例研究会発表要旨

第1回 4月13日

(1) スポーツと政治—政治学概念を用いた分析 #02

加藤 大仁

※本報告は平成15年度浅野基金研究補助による成果報告である。

【目的】

短期的にはスポーツ政策形成過程に登場するアクターや、その影響力関係を分析するとともに、スポーツ政策、更には政策形成過程一般の問題点を考察することを目的としている。長期的にはスポーツが政権担当者の正統性、統治能力を高めるうえでいかなる役割を果たしているのかを考察し、スポーツと政治の関係について実証的・規範的に論じていきたい。

【要旨】

- 1) 以前より我が国のスポーツ政策は貧困であると繰り返し主張されてきた。このような主張はスポーツは公的に振興されるべきだというア・プリオリな仮定の下になされている。しかし、国家によって実現されるべきとされる社会的価値の項目が極めて多くなっている今日では、単にスポーツ振興が重要だと論じるだけでは、そのプライオリティーは低いままに止まってしまうだろう。同時に実際にスポーツ政策が形成される過程が分析されなければ、わが国におけるスポーツ政策の実態は明らかにならないだろう。従って、わが国におけるスポーツ政策を議論するに当たっては、政治学や経済学、政策科学といった学問領域のパラダイムを援用することも必要となる。
- 2) スポーツが公的に振興されるべきだという根拠としては、スポーツ活動のもたらす正の外部性があげられる。しかし、供給規模がどの程度であるべきかなど、残された問題点は多い。

3) 従来国レベルのスポーツ政策をとり纏めてきたのは文部省体育局である。日本体育協会やJOCの事務局長として文部省スポーツ課長が天下ってきた慣行もあり、スポーツの頂上団体と文部省の密接な関係が伺える。しかし、政策形成過程でどのような意見集約がなされているのかは殆ど分析されてこなかったので、今後の大きな課題といえよう。一方、大きな政策変更や、背後に社会的な価値の対立などを抱えている場合、政策決定の場の有力なアクターとして政治家が影響力を行使することもある。従って、スポーツ政策を議論する場合には比較的ルーティン化した官僚主導型のものと、そうでないものを分類して考える必要があるだろう。

(2) アルコールの体温調節に対する影響

依田 珠江

一般にアルコールを摂取すると「体温が低下」することは知られている。しかし、アルコールの体温低下作用の正確な機序は明らかにはなっていない。アルコールには血管の拡張作用があると言われていることから、アルコールの摂取時に皮膚血管が拡張し熱放散が盛んになる結果、体温が低下すると考えられている。しかし我々の日常の経験ではアルコール摂取時には「暑く」なるのではないだろうか。もしアルコールが末梢だけに作用して体温が下がり、体温調節中枢には変化がないなら、その体温低下を抑えるためにむしろ「寒く」感じるはずである。このことはアルコールが中枢に作用して体温の調節レベルを低下させることを示唆するものである。そこでアルコールの体温調節に対する影響の仕方として以下のような二つの仮説を立てた。

- (1) アルコールが血管拡張作用をもち、その作用によって皮膚血流量が増加し、熱放散が促進されることによって体温が低下する。

(2) アルコールの体温調節中枢に対する直接作用によって、体温の調節レベルが下がり、熱放散反応である発汗、血管拡張が亢進することによって体温が低下する。

本研究では、アルコール摂取による体温低下の要因が、アルコールが末梢の血管に作用することによるのか、あるいは脳の体温調節中枢に作用することによるのかを明らかにすることを目的とした。33℃の室温下においてアルコール（15%、3cc/kg）または水を摂取したときの体温調節反応および主観的温度感覚を調べた。現在までのところ、アルコールを摂取すると、深部体温は低下し、そのときの体温調節反応では発汗量の増加が見られた。主観的温度感覚はアルコール摂取時に「暑い」と感じる傾向が示された。仮説(2)を支持する結果が得られつつある。今後は被験者数を増やし、さらにアルコール摂取時の代謝反応をみるため、25℃の環境温条件での実験を行う予定である。

第2回 5月11日

(1) 狂言役者の基本的な動作と呼吸パターンの関係

小林 ゆい

本研究では、古典芸能における演技技法に関する芸談において、様々に語られる「イキ」という言葉に注目し、狂言役者、歌舞伎役者を被験者に基本的な動作演技中の動作と呼吸パターンとの対応関係について実証的に検討を行ってきた。

今まで得られた狂言役者5名、歌舞伎役者1名の実験結果から、熟練に伴う変化の方向性や狂言と歌舞伎の熟練者には共通の現象がみられることなどが観察された。

ところで現在の課題の一つに、得られた演技中の動作と呼吸パターンの関係が、狂言あるいは歌舞伎演技中に限られた現象であるのかどうかを明らかにすることがあげられる。

そこで現在、比較対照動作として自転車ペ

ダリング動作を取り上げ、狂言役者2名を被験者とし、実験検証を行った。

【実験結果および考察】

被験者である狂言役者2名には、ペダリング動作と呼吸相の切り替え時に対応した呼吸パターンはみられなかった。一方、一般被験者2名には、対応関係がみられた。

狂言役者2名においてみられた、演技中(10分間の舞)における動作と対応しない呼吸パターンが、狂言演技中に限られた現象である可能性は否定された。しかし今後、他の狂言役者においても同様の結果が得られるのかなどについて引き続き検証することを課題とする。

(2) 大学アメリカンフットボール選手における足関節靭帯損傷と身体的特性およびポジション特性との関係について

西村 忍

大学アメリカンフットボール選手を対象に、足関節靭帯損傷に関する既往歴調査を行い、身体的特性およびポジション特性との関連性について検討した。特に、内側靭帯複合損傷がしばしば身体の大きいオフenseライン(以下OL)やディフェンスライン(以下DL)によって引き起こされているだろうと仮定し検討を加えた。

被検者は大学アメフト選手53名であった。調査項目として(1)整形外科的メディカルチェック、(2)足関節損傷既往歴調査、(3)個人面談を実施した。そして足関節靭帯損傷を経験した対象者別に、(1)外側靭帯複合損傷あり群、(2)内側靭帯複合損傷あり群、(3)靭帯損傷なし群の3つに分類した。その結果より以下のことが分かった。内側靭帯複合損傷は全体の35%を占めた。更に、内側靭帯複合損傷あり群は、外側靭帯複合損傷あり群と靭帯損傷なし群の両方と比較して、体重とBMIが有意に重くかつ大きかった。最後に、OL・DL・ラインバッカー(以下LB)における内

側靱帯複合損傷の発生率は75%と最も高値であった。

以上の検討の結果、内側靱帯複合損傷は、体重・BMIの大きい選手あるいはOL・DL・LBの選手に多く観察されたことから、内側靱帯複合損傷のリスクファクターは体重・BMIの高値あるいはポジション特性が挙げられる。

第3回 6月15日

(1) テニスナショナルチームのための戦術分析方法の開発

村松 憲

これまで、日本テニス協会強化本部スポーツ科学委員会では、体力面、心理面、栄養面、医学面などからナショナルチームをサポートしてきたが、平成15年から、戦術面を強化することになり、発表者らが試合の撮影、分析などを行っている。しかしながら、どのような方法で分析するのがいいのか、という点については未だ定まっておらず、そのため縦断的、横断的な比較ができないのが現状である。現在、①競技力向上に直接役立つ、②誰にでも簡単に分析できる、③選手にすぐにフィードバックできる、④高価なソフトウェアを使用せずに行える、という条件を全て満たすような方法を検討中である。

上記4つの項目を全て満たす方法として、現場からの要請が多い、サーブとリターン、およびどちらがポイントを獲得したのかという点のみを記録する方法を検討している。具体的には、1stサーブが入ったかどうか、2ndサーブが入ったかどうか、それぞれのコースがどうだったか、リターンのコースがどうだったか、というデータに加え、どちらの選手がポイントを獲得したのか、という点を試合中にリアルタイムに記録する方法を主として採用し、国際大会等で選手にフィードバックしている。現状では主として紙とボールペンで作業を行っているため、集計に時間

がかかっているが、今後はパソコン上で試合中にリアルタイムに作業が行えるよう、検討を続けている。

(2) テニス選手における精神力の構造について

平田 大輔

テニスの競技場面では精神力が非常に重要だと言われる。技術や体力を習得していても十分に発揮するための精神力が伴わなければ、実力を発揮することは困難である。そこで本研究では、テニス選手における精神力の構造を明らかにすることを試みることを目的とした。

方法は、高等学校、大学の硬式テニス部所属の選手、合計780名を対象に行った。質問項目はDIPCA:3(心理的競技能力診断検査)、心理的トラブル尺度、T-TAISを参考にテニスの競技場面に合うように作成しなおした。その他にテニス競技において必要だと思われる項目を加え、計72の質問項目となった。テニス選手の精神力の構造を明らかにするために因子分析を行った。その結果、「作戦判断能力(作戦能力)(冷静な判断)」、「情緒混乱(混乱)(対プレッシャー)(集中力の欠如)」、「競技意欲(精神的強靱さ)(競技向上意欲)」、「リラックス能力」、「自己統制能力」、「状況判断の欠如」、「気持ちの切り替え」の11因子が抽出された。次にこの因子をもとに性差と技能レベルの比較を行った。

性差による比較を行った結果、有意差が見られたものに、「作戦判断能力」「リラックス能力」「気持ちの切り替え」では男子の方が優れ、「状況判断の欠如」では女子の方が優れていた。

技能レベルについては、技能レベルを3群(県大会以下・地域大会・全国大会以上)に別け、各因子の比較を行った。結果、男子では「作戦判断能力」「情緒混乱」「競技意欲」で、女子では「作戦判断能力」「情緒混乱」「競技意欲」「自己統制能力」「気持ちの切り替え」

で技能レベルが高いほど優れていた。今後の課題として実力発揮との関連や信頼性の検討を行う必要がある。

第4回 7月6日

(1) 全日本剣道連盟における国内剣道人口 (有段者)の推移と分布について

吉田 泰将

【目的】

平成15年全日本剣道連盟は50年史を発行した。その資料をもとに、戦後剣道が復活してこれまでの剣道人口の推移を確認すること、また現在の各都道府県における有段者の分布状況から、各種大会における成績との関連などを調査することを目的とした。

【方法】

資料：財団法人全日本剣道連盟「五十年史」
資料編

項目：年度別・段位別合格者数一覧

都道府県別・段位称号別登録者数(平成15年1月)

高段者受審者数・合格者数一覧(平成5年度～14年度)

過去10年の各種全国大会の成績

【まとめ】

1. 初段人口の推移についてみると1987年をピークに減少傾向を示していたが、1997年より増加傾向に転じている。これは中学校、高等学校における剣道部在籍者数の微増傾向を反映したものと思われる。
2. その中で、女子の占める割合を見ると、統計を始めた1976年以降増加をつづけ、現在では33%を超える値を示している。
3. 地域別に有段者の分布を見てみると、人口に比して、東北は5段までの場合、九州は初段から八段まで高い値を示している。
4. 九州の剣道が盛んであると一般的に言われている現状を、全国規模の試合結果において検証してみると、高等学校以下の試合において、顕著に九州優勢の様子が伺える。

さらに、成人においても大都市を要する東京、大阪、神奈川の優勝が多く見られるが、その優勝チームにおける九州出身者の占める割合が高いこと指摘できる。その要因として、首都圏における九州出身の指導者の活躍が挙げられる。

(2) 世界の剣道人口について

植田 史生

【目的】

国際剣道連盟(IKF)が、1970年に設立された。設立当初は17カ国・地域が加盟し、2003年7月現在44カ国・地域を代表する団体が加盟している。

世界剣道選手権大会(1970年から3年に一度)も12回を数え2006年にはChinese Taipeiで13回目を迎える。しかし、他の武道に比較しても人口は多くはない。そこで今回は、90年代から2000年代において世界の各ゾーンでどれくらいの剣道人口の増減があるのか、また、そのことはいかなる理由が考えられるのか検証した。

【結果と考察】

日本の剣道人口 1,333,500人(段位登録済の人数 2003年12月現在)であり、1994年に比べると166,500人の減である。しかし、子供等段位取得をしていない愛好家などを含めると2,000,000人位と考えられる。2004年4月のデータではIKF加盟国計(日本含む)1,756,153人、IKF加盟国計(日本含まず)422,653人である。また、IKF非加盟国計983人の報告もある。IKF加盟国人口のうち、日本の人口は段位登録者のみのため、子供等段位を取っていない人を含むと(段を取得できるのは、日本では中学2年生になってからと規定されている。外国でも14歳以上から)、世界の剣道人口は2,000,000～2,500,000人位であろうと考えられる。この10年でKOREAでは、50,000人、EUROPEAN ZONEでは約6,300人、AMERICAN ZONEでは約3,500人

の増加が見られる。

【まとめ】

10年間で日本の剣道人口は減少している。しかし、世界的（日本以外、特に KOREA と EUROPE）に見れば増加の傾向である。このことから、日本の剣道文化が徐々に普及しているといえるであろう。

第5回 10月5日

(1) 平成17年の介護保険制度見直しに関する 発想

山内 賢

平成17年度に介護保険の見直しが行われる。改正の大きな柱の一つに、介護予防重視型の転換があげられる。急激に増加している要支援、要介護1も認定を受けた高齢者へのサービスが、原則として、訪問介護などの従来型の給付から、新予防介護給付に切りかわるのである。今回の研究会では、予防介護を念頭に置いた、以下に述べる機器開発のアイデアを発表した。

わが国における高齢者人口（65歳以上の老年人口）は急激に増加していて、国立社会保険・人口問題研究所の報告によると、2014年には4人に1人が高齢者になることが予想されている。その後も老年人口の割合は増え続け、2050年には2.8人に1人が高齢者となるものと予測できる。このような高齢者社会においては、高齢者の豊かな人生経験や知識を生かした社会参加が望まれる一方、高齢者の健康と体力の問題が重要な課題になり得ると考えられる。

高齢者の健康維持に関して現在課題となっている項目のひとつに転倒予防がある。転倒を予防するには、第一に身体の運動療法が考えられる。高齢者の運動機能は個別性が大きいいため、運動療法を行うには、まず個々の運動機能状態を的確に把握する必要がある。これに科学的な視点で取り組むためには、運動機能を手軽に評価する方法の開発が必要である

と考え、高齢者を対象とした生活活動能力テストの機器の開発を創造することを試みた。具体的には、①起立性運動動作、②歩行運動動作、③反応時間運動動作、④物体移動（作業能力）運動動作、⑤柔軟性運動動作、等の運動が実際に測定出来る機器開発のことである。

従来、ストップウォッチ等で記録者が測定する場合には、測定時に計測器を操作する第三者による測定動作が必要であった。今研究では、運動計測も他人の手を借りることなく測定できる運動効果測定器を開発することを目的とする。また、この運動効果測定器には、平衡感覚測定や光刺激発生スイッチ、音声発生刺激スイッチ等も機能として装備し、携帯性を有し、さらに子供や障害者にも考慮したユニバーサル（バリアフリー）的なデザインと操作性を迫及することも必要となる。

(2) スポーツ倫理とドーピング

松田 雅之

毎週のようにドーピング疑惑や違反者の報道がなされている。ほぼ毎年のように、国際オリンピック委員会（IOC）をはじめとする国際競技連盟が、ドーピングに該当する薬物や方法を禁止事項に加えるが、次の年にはまた新たな物質や方法が加えられます。1968年のグルノーブル冬季オリンピック大会で初めてドーピング禁止規定が施行されてから現在まで、こんなことの繰り返しです。そして2003年からは「遺伝子治療を応用する方法」がドーピング禁止方法として追加された。そしてアテネオリンピックの薬物検査分析を担当した、世界反ドーピング機関（WADA）公認分析機関のコスタス・ヨルガコプロス所長は、過去20年以上も検出方法がなかった禁止薬物、ヒト成長ホルモン（hGH）の検査法が、アテネ五輪直前に完成し、約400人の選手の血液サンプルが分析に回されていたことを明らかにした。一方、五輪期間中、筋肉増

強剤のアナボリック・ステロイドのど、「基礎的な」薬物の陽性が多く出た点については、アテネの分析機関が備える分析器が、実はWADAが定める基準を大幅に超える精度を持っていたことを明らかにした。今回の分析器（HRMS）の精度は、分析機関に義務付けられた基準値の20倍以上とされ、くしくも、ソウルオリンピックで新たに導入された、西ドイツ製の分析器によって、ベンジョンソンのドーピング違反が摘発されたことと類似している。これまで、アテネの分析機関は、ギリシャで、あまり大きな国際競技会もない為、表にでることがなく、制度の高さが知られていなかった。今回の大量の違反者が出た理由として、選手、コーチ側が意表を突かれた可能性を指摘している。

【問題点】

1) なぜドーピングをするのか？

1970年～1980年台・・・国威発揚の為の国家的ドーピング（旧東ドイツ）。現在はトップアスリートを取り巻くプロジェクト単位

2) 抜き打ち検査の実施により世界ランク30位以内の選手にはドーピング計画が難しい現状。実情は、選手との連絡が取れないなどの理由で、検査拒否する選手が多い。

3) ソルトレイク五輪より導入された血液検査も、宗教的な理由で検査拒否する選手が多かったがIOCは、検査拒否は違反とみなし参加させないことを公に公表した。

第6回 10月12日

(1) キャンプにおける感情の変化—プログラムとグループ内の相互作用に着目して—

野口 和行

本研究では、キャンプ期間中の主観的な感情の変化を明らかにすると共に、参加者の体験したプログラム及びキャンプ中のグループ内の相互作用に着目して感情の変化の要因を記述することを目的とした。本研究の対象者

は、平成15年に選択科目の授業として実施された大学のキャンプ実習参加者34名であった。主体的感情を測定するために、寺崎らが作成した多面的感情状態尺度を使用し、それぞれ4件法で回答してもらった。また、感情を生起した場面、最も強く感じた感情、周りとの関係、感情に影響を及ぼした関係に関する質問項目より、感情を生起した理由を検討した。調査結果のうち、量的データは必要に応じて統計処理を行った。質的データはカテゴリー化し、参加者が選択したプログラム、グループ内の相互作用による感情の変化についてはスタッフによる参与観察、参加者の日記の内容も加味して記述し、考察を試みた。否定的感情のうち、抑うつ・不安に関しては2日目にかけて上昇しているが、4日目にかけて有意に低下している。また、敵意、倦怠もキャンプ期間中を通して有意に低下する傾向が見られた。また、中間の感情のうち、驚愕が1日目～2日目、1日目～3日目で有意な向上が見られた。肯定的感情は、特に親和がキャンプ期間中を通して有意に向上した。これは先行研究の結果ともほぼ一致し、キャンプの時期や場所、プログラムが違うキャンプでも同様の傾向が見られることが示唆された。

このキャンプではメインプログラムとして、2日目、3日目に克服的な活動を含んだ身体活動中心の選択プログラムを実施した。2日目のプログラムにおいては有意差がみられなかったが、3日目のプログラムにおいては、倦怠の感情でトレッキング参加者がビバーク参加者に対して有意に高く、活動的快の感情でビバーク、ロッククライミング参加者がトレッキング参加者に対して有意に高かった。また、驚愕の感情でロッククライミングの参加者がトレッキングの参加者に対して有意に高かった。

グループ内の相互作用についてこのキャンプは、グループの活動として、1日目の夕食

作り、4日目の午後から行われる会食形式のパーティーのメニュー作成を2日目の午後に行い、4日目の午後から準備を行い、パーティーを行った。メニュー作成の際、グループ内の相互作用を促進させるために、趣向を凝らしたメニューを作成するよう指示し、スタッフによるチェックを行った。2日目のメニュー作成の過程で、1グループだけメニューの作成が4日目の午前中までかかるという状況があった。

そこで、グループ別の感情得点の変化を見ると、メニュー提出が遅れたグループは、2日目、3日目において抑うつ・不安、敵意の感情で他の班に比べて有意に高かった。最も強く感じた感情についても2日目に抑うつ・不安の感情を挙げたものが1名、敵意の感情を挙げたものが1名あり、3日目には、抑うつ・不安の感情を挙げたものが1名、倦怠の感情を挙げたものが1名あった。また、その感情を生起した場面として、2名が班のミーティングを挙げており、3名がパーティーのメニューが決まらないことを理由に挙げている。しかし、4日目の夜には、否定的な感情が低下した。最も強く感じた感情についても、4名が親和などの肯定的感情を挙げ、2名が驚愕、1名が集中の感情を挙げている。その理由として、「予想を超えて遥かにみんなのコンビネーションがよかったため」、「パーティーで苦労して作ったピザが品切れになったこと」などがあった。感情に影響を与えた要因として4名がグループのメンバーとの関係を挙げており、グループ内の葛藤や協力など、グループ内の相互作用も参加者の感情に大きな影響を及ぼすことが示唆された。

(2) プロ野球の現状と今後の動向について

綿田 博人

6月13日にオリックスと近鉄の統合が打ち出された。これに端を発して色々な問題が次から次へと浮かびあがってきた。

現状・・12球団でセ・リーグにおいては、ヤクルトと横浜が赤字決算であることを認め、パ・リーグにおいては、全球団が実質的に赤字であると報告した。その赤字総額は154億円に達した。これを各球団は広告宣伝費などの名目で親会社から補填してもらっていたのが現状である。赤字の原因の一つとして考えられるのは選手の年棒の高騰である。人件費だけで入場料収入が消えるといういびつな構図である。また、セ・パの経営格差はテレビ放映権料の差であると言える。巨人を除くセの球団が1リーグ制に反対する理由はそこにある。

動向・・12球団維持に向けて、ライブドアと楽天が新規参入に名乗りを上げ、新しい1球団が誕生することになった。しかし、これで球界再編が終わったわけではない。球団とリーグの運営は車輪と外周である。コミッショナーを中心にリーグが球団間の利益や戦力を配分し、スポーツブランド全体の価値の向上を図る運営スタイルをとるべきであると思われる。例えば、大きな収入源であるテレビ放映権料やライセンス収入などをリーグが一括管理して各球団に配分することも一案である。また、年棒を抑える手段としてサラリーキャップ制の導入も一考の余地がある。戦力の均衡が緊迫し、白熱したゲームを生み、観客が増えるわけであるから、ドラフト制度の見直しも急務であると思う。

第7回 11月9日

(1) 講道館柔道創設時から発展まで (明治15年～22年)

安藤 勝英

前回の研究会では、現行実施の講道館柔道がどのような過程で柔術から転換され、現在のスポーツ柔道に発展したかについて検討した。今回は、殊に明治15年から22年の間、講道館柔道がその創設期における展開の中で嘉

納治五郎氏の考え、またその当時の社会の受け入れについて発表した。

明治15年に講道館柔道が創設されたが、当時の日本は欧米文化の導入、日本在来の文物を破棄し、専ら欧米の文物を模倣する時代でもあった。この為、日本古来の武術を更に発展させることは非常な苦勞であったことと考えられる。嘉納は帝大卒業後、学習院大学講師であり、道場経費その他は、翻訳代で工面した。16年になると坪井久馬三博士、当時学習院の学生、後の貴族議員樋口誠康子爵、有馬純文子爵の講道館稽古の参加が始まる。後に彼らたちが講道館柔道の社会的進出に大いに貢献することになる。又、18年頃から警視庁武術大会に於いて門弟、富田、西郷、横山、山下等の活躍により講道館柔道を一躍有名にする。

このような変遷を経て、19年以降になると講道館の組織が確立され始める。20年頃から教育的意義も浸透され始め、学校関係でも実施され始めた。本塾での講道館柔道の始まりは20年頃と言われている。22年には講道館から正式に山下義紹師範を招聘し、益々盛んなものとなった。

(2) 日本のフットサルについて

— 少年少女へのすすめ —

須田 芳正

近年、日本においてフットサルは広く愛され、多くの愛好者によって楽しまれている。フットサルは競技スポーツだけでなく、レクリエーションスポーツ、生涯スポーツ、コミュニティスポーツとして老若男女がいつでもどこでも楽しむことができる5人制のサッカー競技であり、サッカーを競技する上での人数、場所というデメリットを解消した手軽なスポーツである。現在フットサル施設は373ヶ所になり、特に首都圏には135の全体の4割を占めていることから、都会型スポーツとして発展を続けている。

また、フットサルは少年少女に非常に向いているスポーツといわれている。小スペースで行われるため子供たちの体力に合っていることと、少人数で行われるのでボールに触る機会が多く参加意識が強く感じられるスポーツだからである。

専門的なことを言えば、フットサルはサッカー選手を目指す子供たちの育成に絶好なスポーツでもある。小スペース、少人数で行われるフットサルをプレーすることにより正確な技術、すばやい判断力、相手との駆け引きなどを自然と学ぶことができる。

ブラジルではフットサルはサッカー選手になるためのワンステップのスポーツとして用いられることが多くなってきている。ロナウドをはじめほとんどのブラジルのサッカー選手は少年時代にフットサルをして育った。日本においても少年期にフットサルをして技術を磨いた代表選手が増えてきている。日本代表の小野信二は小学校6年生の時、全日本少年フットサル選手権でMVPに輝いている。したがって、今後日本においてもフットサルを中心とした育成プログラムが組まれることが、日本サッカー、フットサルの普及、強化につながっていくと思われる。

(3) 慶應義塾の体育教育に関する一考察

— 慶應義塾普通部の創設期から —

石手 靖

学校における体育の重要性を認識し、日本で最初に実践した慶應義塾の体育が如何なるものであったのか。またスポーツの実践は如何なるものであったのか。これらのことを検討することは、わが国における今後の体育・スポーツの実践にとって意義ある事と考える。

慶應義塾における体育を考えるにあたり、今回は慶應義塾普通部に焦点を当て、その創設期(明治中期)における文献考証を行った。普通部の教育は「人間なら誰でもが身につけ

ておかなければならない基本的な、普遍的なことの重要性」がその理念であり、体育の場面でも、体操及び教練という授業のほか、対抗戦、全塾運動会、部会（現在でいう課外活動・クラブの意）、各種学校（スキー、海浜、林間等）、寄宿舍での運動などに積極的に取り組み、多様な実践を行った。これらのことは体育およびスポーツに単なる授業における教育の重要性を求めたのではなく、学校教育全体を視野に入れたものであったと推定できる。また体育会の設立にもその理念が大きな影響を与えたと考えられる。

この当初の発想は英国のパブリックスクールを描いたもので体育とスポーツのそれぞれの重要性を認識、実践したものである。しかしながら国の富国強兵の政策と相まってその実践方法は歪み、スポーツが体育の中に入り、学校体育とスポーツが一体化してしまったと考えられる。

今後は学校における体育教育とスポーツとの区別を明確にし、スポーツが慶應義塾の一貫教育に及ぼす影響を検討しそれに期待をする時代にあると考えられる。また公教育との比較も必要である。

第8回 12月7日

(1) ボールルームダンスの指導

肩甲骨と骨盤の使い方

篠原しげ子

ボールルームダンスの指導で、身体感覚（何をしているか・どう動こうと思っているのか）を養ってもらいたいと思っている。

先ず2本の足でバランスよく立つために、肺筋や腹筋をしっかり使う。特に背骨をまっすぐに保つために頭の位置を正しく。動きの推進力を生み出すために足の指を使う。動きの方向性を保つために臍の向きを意識する。動きを滑らかに、安全のための膝の使い方などを重点的に指導している。一人で動くのとちがって、二人で動くための難しさがある。

動きを見てすぐ動けるヒトは少ない。見て、説明を聞いて、数回動いて、納得して、組んで動くという順序であるが、説明でイメージを正確に持ってもらいたいと、少ない語彙を駆使しているが、反応の違う人がいる。その人の思考過程、神経回路など、つかめると面白いと思うが、其の点に時間を多くさけないのが現状である。

ある程度踊れる段階にきて、さらにステップアップのためにはぎこちない動きから滑らかに大きくスピードのある動き・社交のためだけでなくスポーツとして運動量を多く動けるようになるためにはさらに、肩甲骨や骨盤（股関節）の動きも連動して動ける必要がある。ダイナミックに、スピードのある動きについていく場合、股関節が引かかる感じで動きが止まってしまうことがある。この場合、左右のヒップの高さ・骨盤の高さを変えるとスムーズに動ける。又、初心者は足から先に出してくるのでお互いに踊りにくい、胸から足をつもりで前進してくるのにはフォローしやすい。肩が上がってしまうと動きが上ずってしまってリードが伝わりにくい。など骨盤と肩甲骨の関係を体得させたいと試みている。

リーデイングフット側の骨盤を高く、肩甲骨を下げるように意識するとスムーズに動けるのであるが、これがなかなか上手く出来ない。競歩のイメージに似ているが、学生はあまり見たことがないらしく、イメージがつかめないらしい。脚のつけ根を振り子の中心と考えるのではなく胸椎（みぞおち）の高さにあると考えると身体中心軸から左右に腰骨（大転子）をずらせる骨盤運動がなくなり、着地はみぞおちの高さの背骨を結ぶ直線上に膝と骨盤を一緒に載せる形で着地する。この感じを掴んでもらうために言葉で説明するが、体で納得するまでに時間がかかるので、練習時間の短縮のために、機械などで実感できる工夫している。その一例として、自転車型の機械

を紹介した。

(2) 文化としてのウォーキング

近藤 明彦

健康を指向するエクササイズとしてのウォーキングが近年盛んに行われている。しかし、エクササイズ・アドヒレンスの観点から見ると継続的な運動実施が必ずしも良好に機能していないことも指摘されている。また、これまでウォーキングに関する研究は運動生理学的な観点からが主体であり、人文・社会科学領域の研究がそれほど多くなされていない点も問題とされている。

そこで本プロジェクトは、特に人文科学的な観点から18世紀から20世紀初頭までのイギリス、アメリカ、ドイツ、日本の歩行文化の形成を中心にその背景を探るとともに、社会科学の観点からは地理情報システムのウォーキングへの活用について、自然科学の観点からはスポーツ医学・体育科学の立場からウォーキングの効果について実証を行おうとしたものである。すなわち、ウォーキングを多面的な観点から検討することにより、文化としてのウォーキングを明らかにしようとしたものである。

異なる専門分野をもつ研究者が、ウォーキングという日常の活動を多面的にその専門分野から検証することにより、これまでにない新たな視点をウォーキング実践の場に取り入れることに務めた。また本プロジェクトでは研究の成果を現場である授業に取り入れるとともに、公開講座等により広く社会に還元し、そこから得られるフィードバックを新たな研究展開に取り入れることを目指した。すなわち、プロジェクト研究で得られた新たな知見をもとに、ウォーキングの継続的実施の促進を図ることを目指した。

本研究ではまず、人文科学的分野からの課題としてイギリス、アメリカ、ドイツ、日本での歩行文化の形成について検討を加えた。

成果は以下の通りである。

- 1) 歴史的にはイギリスにおける啓蒙主義思想後のロマン主義と歩行文化が結びついている背景、および産業革命以降の社会変革にともなう都市化に対する反発から生じる庶民運動としての歩行文化とともに、王侯貴族の自己アイデンティティ確立がウォーキング文化成立の背景に有ることが確認された。アメリカにおける歩行文化においても19世紀当初は都市化に対する反発やそれに結びつく国立公園運動、さらには自己アイデンティティの確立にまで歩行文化が関連している様相が伺えた。ドイツにおいてもイギリス由来の散歩文化が近代化に伴い開花するとともに、20世紀初頭においては閉塞した時代背景のもと生活改善運動の一部としての戸外活動としての歩行文化が成立する様相が確認された。日本では明治期における外国文化の移入と同時に当時の知識人達が西欧文化に影響を受けた文学者作品に触発されさまざまな北文化を発展させてきた様相が認められた。さらに、近代の西洋舞踊や日本の舞踏においてもそれまでの形式的な自己をどう捕らえるかという観点から足と地面の接触が意味を持ち歩くことそのものが見つめ直されていることが検証できた。
- 2) さらに社会科学的アプローチでは、従来の地図情報に比較してGISを用いることがウォーキング実施に際してさまざまなバリエーションを与える可能性が示唆された。
- 3) 自然科学的アプローチからは、運動強度並びに各種生理学的指標をもとにさまざまな検討を行い日常運動非実施者が定期的にウォーキングを生活の中にとり入れることにより歩行速度とそれに伴う運動強度の上昇が明らかになり軽運動の健康への効果が認められるとともに、より運動の効果を高める手段としてのポールウォーキングの効果が大きいことも実証できた。さらに、

これら運動にともない快感情の変化が顕著であり、本人に適した運動強度であれば、快感情をともない、軽運動であってもその継続によって体力レベルが向上することが確認できた。

以上の研究成果をもとにそれを授業や公開講座によって還元したところ、特に文化的な側面からウォーキングを取り上げて動機付けることが運動の継続実施の鍵となることが認められて、これは認知的方略としてのデショシエーション方略として位置づけられ、この点で本研究の成果が有効であるということが確認された。

また、異なる専門分野を持つ研究者がウォーキングという同一のテーマについて多面的な研究の展開を行いその成果を共有すること、またその成果を取り入れた授業・公開講座等からのフィードバックにより、新たな観点による研究テーマの設定・展開ができた。

第9回 1月11日

(1) 判例報告 サッカー大会高校生落雷負傷事件

高嶺 隆二

大型で強い台風の接近・通過が予測され、且つ雷注意報が発令されていた気象状況の下で行われていたサッカー試合中の高校生が、落雷の直撃を受け、重篤な後遺症を被った事故に対する損害賠償請求事件の裁判で、試合を中断・中止せず続行させたサッカー指導者並びに大会関係者に雷の危険性を認識し、落雷事故の発生を予見して事故を未然に防止する安全配慮義務があるか否か、が争点となった判例の報告を行った。

◎判例「高校サッカー部員落雷負傷事件」

平成11年(ワ)第116号 平成13年(ワ)第492号 損害賠償請求事件

高知地方裁判所 平成15年6月30日 判決(請求棄却)

【事件の概要】

平成8年8月12日から15日の予定で、全国から62チームが参加して大阪府高槻市で開催された「第10回高槻ユース・サッカー・サマー・フェスティバル」で、8月13日午後3時35分頃、私立土佐高校サッカー部の部員が試合中に落雷の直撃を頭部に受けて転倒、意識不明となって救命救急センターに移送され、救急手当てを受けて一命は取り留めたものの、視力は0.001の失明状態で、両下肢機能全廃、両上肢運動能力微弱という重い後遺症が残り、高校の授業を受けることができなくなり退学をせざるを得なくなった。

このことで、被害者本人ならびにその両親等が、土佐高校、高槻市、同市体育協会、同市サッカー連盟会長に対して安全配慮の義務違反があったとして、総額2億6千万円余の損害賠償の請求を行った。

【原告の主張の主旨】

8月12日には、日本の南方海上に大型で強い台風12号があり、日本列島に接近中であった。天気予報では、12日ないし13日には大阪地方を通過するとの予報があったうえ、13日(事故当日)には台風の影響で断続的に強い雨が降り、稲光りや雷鳴が確認される等の気象状況で、さらに大阪地方管区気象台からは雷注意報が発令されていたにもかかわらず、被告らは試合を中断・中止することなく続行し、本件落雷事故を発生させ、事故を未然に防止するための安全対策を怠った安全配慮義務違反があった。

1) 被告・土佐高校の責任

「在学契約」に基づいた生徒の生命・身体に対する安全配慮義務の懈怠

野外スポーツと気象条件による危険発生と予防対策の知識を持ち合わせない教員を監督・引率者として派遣したこと、さらに事故当日、当該教員が事故を予見し、回避のための行動を執らなかつた安全配慮義務違反(民法第709条、710条、715条)。

2) 被告・高槻市の責任

①大会運営に参画していた市職員の不法行為に対する使用者責任、②会場施設の管理者としてグラウンドの施設の不備（瑕疵）を放置し、大会参加者の安全を確保し事故を未然に防止するための管理上の義務違反、③さらに斯かる悪天候に鑑み試合の中断・中止を検討するなど万全を尽くすべき義務を怠った安全配慮義務違反（国家賠償法第1条、2条、民法第709条、715条）

3) 被告・高槻市体育協会の責任

協会傘下のサッカー連盟会長（大会実行委員会委員長）の不法行為に対する使用者責任（民法第715条）

4) 被告・高槻市サッカー連盟会長の責任

大会実行委員長の立場での不法行為責任（民法第709条）

【裁判所の判決と判決理由】

これに対して裁判所は、「原告らの請求はいずれも理由のないことに帰するので、これらをいずれも棄却することとする。」と原告敗訴の判決を言い渡した。

【理由】

1) 土佐高校の責任について

引率教員（監督）の落雷事故の予見可能性について、「当時、グラウンドに居合わせたサッカー指導者のほとんどが、本件落雷事故が発生するまでは落雷の危険性を全くあるいは殆ど感じていなかったことが認められ、本件フィールドの選手に落雷することを予見することが可能であったとは言えず、また予見すべき義務があったとはいえない。」従って、学校の安全配慮義務違反があったとはいえない。

2) 高槻市の責任について

高槻市は、本件フェスティバルの開催に関しては関与しておらず、当該市職員は体育協会並びにサッカー連盟の役員に参加していた事実はあるが、あくまでもボランティアとしての参加であり、職務命令を帯びてのものではない。また、本件グラウンド

は大阪府の所有物であり、高槻市が行政財産使用許可を得て使用しているに過ぎない。また避雷針、避雷舎が設置されていないことで、当該グラウンドが通常有すべき安全性を欠いていたということとはできない。従って高槻市には、国家賠償法第1条、2条、民法第709条、715条の責任があるとは云えない。

3) 高槻市体育協会および高槻市サッカー連盟会長の責任について

本件フェスティバルは、昭和62年に高槻市内の高校サッカーの指導者たちが複数のチームと練習試合をする機会を設けたいとの希望をサッカー連盟に持ちかけたことが発端となって同年第1回大会が開催されたもので、大阪府内の高校サッカーの監督たちが委員となって組織された実行委員会が企画、参加の呼びかけ、グラウンドの管理等運営全般を担っていた。

サッカー連盟会長は、実行委員会の委員長として名前を連ねているが、これは、慣例上、連盟会長が実行委員長を務めることになっていたため、いわゆる名誉職であり、実際の運営には関わっていなかった。従って、連盟会長には安全配慮義務違反の不法行為責任はなく、体育協会についても、傘下連盟会長に対する民法第715条の責任はない。

(2) 日吉キャンパスにおける新しい授業展開の可能性～伝統芸能体験授業報告～

佐々木玲子

平成16年度日吉キャンパス「新しい教養授業の支援」の事業として採択され、秋学期期間に実施した「本物に触れる 頭と身体で学ぶ伝統芸能（演習）授業（事業代表 小林ゆい）」の実施報告を行った。

本授業は今年度の日吉キャンパス「予算管理部門内調整費」による補助を受け実施されたものである。担当者らは、学生達が“自国

の文化を教育の場で知識として知ると同時に身体を通して体感する、さらに本物に触れる”ことを目的として本事業を計画した。事前の検討の結果今回対象としたものは、「狂言」「歌舞伎（日本舞踊）」「文楽」の3種類であり、それぞれのコースに分けて受講者を募集した。それぞれのコースで、「共通講義」－「専門の実演家を講師とした体験教室」－「劇場での鑑賞会」という流れをもった形態の授業を行った。実施は秋学期10月から12月の期間、できるだけ学生の他の履修に影響の無い日程（土曜、日曜、夜間）を組んだ。

履修学生はほぼ定員（各コース30名）に達した。すべての過程終了後、受講学生に対してアンケート調査を行った。アンケートにおいては、本授業の目的が達せられたかどうか、ということに加え、今後こういった形態のものが日吉キャンパス内においてどのように展開しうるか、ということの参考となるような質問内容を取り入れた。限られた人数ではあるもののアンケート結果より、本事業の目的としたところはほぼ達成することができたと考えられる。また、今後の日吉キャンパス内で、特に体育研究所を発信元とする展開の仕方を模索すると、体験をキーワードにしたテーマ（運動、スポーツ、健康、環境、地域、など）が見出され、さらに事業を通常の授業という枠にとらわれず、広く学生に提供していける可能性があるのではないかとことが考えられる。

3. 浅野基金研究補助による研究成果報告

研究課題 高齢者生活活動力テストの開発

研究責任者 山内 賢

研究協力者 平田大輔

研究実績の概要

1. はじめに

わが国における高齢者人口（65歳以上の老

年人口）は急激に増加していて、このような高齢者社会においては、高齢者の豊かな人生経験や知識を生かした社会参加が望まれる一方、高齢者の健康と体力の問題が重要な課題になり得ると考えられる。

平成17年度に介護保険の見直しが行われた。改正の大きな柱の一つに、介護予防重視型の転換があげられる。急激に増加している要支援、要介護1も、認定を受けた高齢者へのサービスが、原則として訪問介護などの従来型の給付から、新予防介護給付に切りかわるのである。高齢者の「介護予防」が急務となっている現在、この分野では、「パワーリハビリテーション」と呼ばれる手法が提唱されているが、ほとんどの場合、高価な装置が必要だけでなく、トレーニング内容についても、高齢者や障害者などに向いているとは思えない（厚生労働省・衆議院厚生労働委員会の時事通信・4月15日）。そこで今回の研究の目的は、予防介護を念頭に置いた、安価で、持ち運びも容易な、そしてさらには、ゲーム感覚を持ち合わせた生活活動力を向上させるための測定器、及び、解析システムを開発することにある。すなわち、「介護予防」に新たな解をもたらし機器開発の創造を試みることである。

2. 方法

高齢者の健康維持に関して、現在課題となっている項目のひとつに転倒予防がある。転倒を予防するには、第一に身体の運動療法が考えられる。高齢者の運動機能は個別性が大きいため、運動療法を行うには、まず個々の運動機能状態を的確に把握する必要がある。これに科学的な視点で取り組むためには、運動機能を手軽に評価する方法の開発が必要であると考え、高齢者を対象とした生活活動能力テストの機器の開発を創造することを試みた。具体的には、①起立性運動動作、②歩行運動動作、③反応時間運動動作、④物体移動（作業能力）運動動作、⑤柔軟性運動動作

等の運動を測定する。従来、ストップウォッチ等で記録者が測定する場合には、測定時に計測器を操作する第三者による測定動作が必要であった。今研究では、運動計測も他人の手を借りることなく測定できる運動効果測定器を開発することを創造してみた。

3. 結果と考察

本研究は、測定器の開発とパソコンへのデータ転送システムの開発とで成り立っている。測定器は、高齢者の日常生活の場面で必要とされる生活活動能力に即した測定を行なえるとともに、長期にわたり測定結果の蓄積や解析ができるように工夫した。

現段階では、1) ランプが点灯してから起床してスイッチを押すまでの時間、2) 障害物を避けてジグザグに歩行する時間、3) 10個程度のボールを右のトレイから左のトレイに移し終わるまでの時間、4) ランプが点灯してからなるべく早く反応するまでの時間の計測が可能になった。

今後は、この運動効果測定器に平衡感覚測定や光刺激発生スイッチ、音声発生刺激スイッチ等も機能として装備し、さらに子供や障害者にも考慮したユニバーサル（バリアフリー）的なデザインと操作性を追及することも創造し、そして、あらゆるタイプの高齢者に対して測定を実施し、日常生活の様々な習慣等との関係を見つけ出し、高齢者のQOLの向上に貢献できる助言を行いたいと考えている。

4. 特別研究期間

研究課題 筋の硬さ変化の生理的要因の検討

氏名 村山 光義

期間 平成16年4月1日～平成17年3月31日

5. 大学体育連合中央研修会参加報告

1) 夏期中央研修会

参加者：村松 憲・西村 忍

開催期間：2004年8月24日（火）～26日（木）

会場：神戸大学・

YMCA 阿南国際海洋センター

主催：（社）全国大学体育連合

主管：（社）全国大学体育連合近畿支部会

後援：文部科学省

「大学体育における野外教育の体験とその意義」をテーマとして行われた今年度の夏期研修会は、初日午前中教室での研修を神戸大学「瀧川記念学術交流会館」にて、午後以降は場所を徳島県の阿南に移して行われた。

参加者は幹事・講師を含めて約60名、うち研修を受ける受講者は約40名であった。初日午前中の講演は、文部科学省高等教育局の小山竜司氏が行い、「大学改革の現状と課題」をテーマに1時間ほど行われた。講演はかなり難解に感じられ、日頃の勉強不足を痛感した。4時間ほどバスに乗り、瀬戸内海を渡って阿南に到着。オリエンテーションの後、日本キャンプ協会会長の酒井哲雄氏の講演があった。テーマは「海洋スポーツの意義と展開」で、海洋スポーツに関する基礎知識などに触れた。2日目からはいよいよ実技研修が行われた。「カヌー・ツーリング」「ヨット」「フィッシング」「スクーバダイビング」の4グループに分かれ、村松・西村共にスクーバダイビングに参加した。実技は2日目の午前中3時間、午後3時間、そして最終日3時間の計9時間行われ、初心者我々も何とか海中を移動できるようになった。数日前に台風が接近したため、海水はひどく濁っており、1mほど先のものが十分に見えない状態であった。また、事前に身長体重を連絡したものの、現地に行ってみると西村が装着できるウェットスーツが無かった。これらの点は予想外であったが、我々にとっては今後に向け

て大いに勉強になった。

2日目の夜は以前慶應義塾大学体育研究所に務めていた齊藤健司氏（神戸大学）が「野外教育の安全と法的問題について」と題して判例を挙げながら講演を行った。また、姫路獨協大学の小田慶喜氏が「姫路獨協大学における野外教育について」、さらには日本福祉大学の小林培男氏が「日本福祉大学における健康・スポーツ演習の例」について事例報告を行った。

実際に実技研修に参加し、また講演・事例報告を聞いて受けた印象は、野外教育は大学生にとって非常に興味深い分野であると思われる一方、他の多くのスポーツ以上に危険性を持ち合わせている、ということであった。大学体育に組み込む場合には、危険を回避するための周到な準備、また法的な問題に対応するための十分な対策が不可欠であると感じた。

2) 冬季中央研修会

参加者：山内 賢・平田 大輔

開催期間：平成17年1月19日(水)～22日(土)

開催会場：安比高原スキー場

ホテル安比グラウンド

参加者：92名（アルペン48名、スノーボード29名）

テーマ：「これからの大学体育連合のありかた・認証評価制度と大学体育・スキー場での応急処置」

実技研修：1) アルペンスキー（上級指導者クラス、初・中級指導者クラス）
2) スノーボード（上級指導者クラス、初心者指導者クラス）
オプションとして、スノーシュー体験・スノーボード級別検定

内 容：

1日目

①実技研修

開講式後、アルペンスキー・スノーボード

の種目に分かれて研修

② 講演

演 題：「これからの大学体育連合のあり方」

演 者：杉山進：全国大学体育連合理事長
ゲストスピーカー

演 題：「アルペールビル五輪に参加して」

演 者：三ヶ田礼一：アルペールビル五輪
ノルディック複合団体競技・金メダリスト

③ 情報交換会

2日目

①実技研修

午前・午後とも各種目に分かれて実技研修

②講演

演 題：「認証評価制度と大学体育」

演 者：小林勝法：文教大学

3日目

①実技研修

午前：各種目に分かれて研修

午後：各種目にて研修、オプション参加者はスノーシュー体験・スノーボード検定

②分科会研究協議（ワークショップ）

演 題：「スキー場での救急処置」

演 者：岩手県スキー連盟パトロール隊

4日目

①実技研修

午前：各種目に分かれて研修、閉講式後解散。

以上の内容に沿って実技研修・講演・分科会を行いました。今後の大学体育におけるスノースポーツの授業運営や指導方法に新たな工夫を取り入れながら、指導能力を高めることはもちろん、多彩なニーズを持った学生への満足度高い実習を展開するための方法論を学ぶことができたと思っています。

Ⅲ. 教育活動記録

Ⅲ-1. 授業の実施

1. 平成16年度体育科目の履修者統計

1) 体育学講義と体育学演習

平成16年度より、体育理論・保健衛生を統合し、体育学講義という名称に変更した。また、理論と実習による新しい形式の授業である体育学演習が開設された。体育学講義のタイトル及び履修者数を表Ⅲ-1-1に、体育学演習のタイトル及び履修者数を表Ⅲ-1-2に示す。

2) 体育実技 A・B

特集で述べたように、平成16年度より実施期間の違いによる分類である体育実技Ⅰ・体育実技Ⅱから、評価方法の違いによる体育実技 A・体育実技 B という分類になった。それぞれの科目は、実施期間の違いにより、ウィークリースポーツ、シーズンスポーツに分けられる。表Ⅲ-1-3に体育実技 A・B（ウィークリースポーツ）の担当者とそれぞれの担当種目、表Ⅲ-1-4に体育実技 A・B（ウィークリースポーツ）の各種目の履修者数、表Ⅲ-1-5に体育実技 A・B（シーズンスポーツ）の各種目の担当者及び履修者数を示す。

表Ⅲ-1-1. 平成16年度 体育学講義のテーマ及び担当者

講義名	コマ数			担当教員	履修者数
	春	秋	計		
スポーツ心理学の世界	1		1	近藤明彦	45
アスリートのためのスポーツ科学	1		1	近藤明彦・佐々木玲子	27
スポーツの効用を多目的にみる	1		1	佐々木玲子・吉田泰将・近藤明彦	15
スポーツと身体（からだ）の基礎理論	1		1	吉田泰将	102
スポーツの技と文化を探る	1		1	植田史生・綿田博人・村山光義・大嶽真人	15
アウトドアを考える		1	1	野口和行	8
健康と運動の科学		1	1	近藤明彦・齊藤郁夫・辻岡三南子	12
政治社会とスポーツ		1	1	高嶺隆二・加藤大仁	12

表Ⅲ-1-2. 平成16年度 体育学演習のテーマ及び担当者

講義名	コマ数			担当教員	履修者数
	春	秋	計		
自然体験活動演習	1		1	野口和行	11
ライフセービング（救急法の基礎）		1	1	山内賢	9
スポーツメンタルトレーニング		1	1	近藤明彦	28
からだの動きをはかる（バイオメカニクス）		1	1	佐々木玲子・村松憲・望月康司	8

表Ⅲ-1-3. 平成16年度 体育実技A・B（ウィークリースポーツクラス）担当者及び担当種目

	担当者	種目
享 受	高嶺 隆二	水泳
"	近藤 明彦	ウォーキングエクササイズ, 体力UPコース
"	安藤 勝英	柔道
"	佐々木玲子	エアロビクス
"	植田 史生	剣道
"	綿田 博人	野球, ゴルフ
助 教 授	篠原しげ子	ダンス
"	松田 雅之	陸上競技, ジョギング, 体力UPコース, 卓球
"	石手 靖	バレーボール(B)
"	村山 光義	特別研究期間
専 任 講 師	山内 賢	ハンドボール, バスケットボール, 体力UPコース
"	吉田 泰将	剣道, 体力UPコース, ソフトボール
"	加藤 大仁	バスケットボール
"	村山 光義	特別研究期間
"	野口 和行	ニュースポーツ, バレーボール, フライングディスク
"	須田 芳正	サッカー, フットサル
助 手	村松 憲	テニス
助 手(嘱託)	依田 珠江	バスケットボール
"	平田 大輔	テニス
"	小林 ゆい	エアロビクス
"	西村 忍	体力UPコース
非 常 勤 講 師	上向 貫志	サッカー
"	遠藤 千草	ソフトボール
"	大嶽 真人	フットサル
"	大津 信行	レスリング
"	小笠原清忠	弓術
"	加藤 幸司	バドミントン
"	加藤 大雄	テニス
"	川西 大介	アーチェリー
"	木塚 孝幸	バスケットボール
"	後藤 完夫	アメリカンタッチフットボール
"	小森 康加	水泳
"	島田桂太郎	ボクシング
"	白井 巧	バドミントン
"	田中由美子	フェンシング
"	手島智佳子	テニス
"	藤平 信一	合気道
"	額田 信相	バレーボール
"	長谷川明子	ゴルフ
"	濱名 邦雄	ソフトテニス
"	平井 克英	バドミントン
"	藤村 武	サッカー
"	堀場 雅彦	テニス
"	松山 保幸	自動車
"	宮田 幸典	トランポリン
"	望月 康司	ソフトボール
"	安松 幹展	サッカー
"	山田美絵子	バレーボール
"	吉田 武	卓球

表Ⅲ-1-4. 平成16年度 体育実技A・B（ウィークリースポーツクラス）種目別履修状況

地区	科目名	コマ数			定員	登録数	倍率	履修者数	充足率
		春学期	秋学期	計					
	アメリカンタッチフットボール	1	1	2	60	22	0.33	26	39%
	アーチェリー	1	1	2	40	48	1.20	48	120%
	ウォーキングエクササイズ	2	2	4	120	78	0.65	92	77%
	エアロビクス	9	9	18	450	487	1.08	417	93%
	ゴルフ	6	6	12	250	281	1.12	221	88%
	サッカー	13	13	26	1000	713	0.71	787	79%
	ジョギング	1	1	2	60	41	0.68	48	80%
	ソフトテニス	1	1	2	40	30	0.75	40	100%
	ソフトボール	6	6	12	372	334	0.90	333	90%
	ダンス	3	3	6	120	112	0.93	102	85%
	テニス	14	14	28	620	928	1.50	658	106%
	トランポリン	1	1	2	40	59	1.48	44	110%
	ニュースポーツ	2	2	4	120	51	0.43	77	64%
	バスケットボール	15	15	30	910	854	0.94	703	77%
	バドミントン	9	9	18	520	658	1.27	554	107%
	バレーボール（A）	6	6	12	450	412	0.92	439	98%
	バレーボール（B）	5	5	10	360	186	0.52	218	61%
	ハンドボール	2	2	4	160	65	0.41	78	49%
	フェンシング	1	1	2	40	31	0.78	34	85%
	フットサル	3	3	6	150	322	2.15	150	100%
	フライングディスク	1	1	2	60	57	0.95	65	108%
	ボクシング	1	1	2	60	72	1.20	72	120%
	レスリング	1	0	1	20	4	0.20	4	20%
	剣道	7	7	14	280	94	0.34	111	40%
	合気道	1	1	2	60	112	1.87	59	98%
	自動車	1	1	2	40	51	1.28	41	103%
	柔道	3	3	6	180	64	0.36	75	42%
	水泳	7	2	9	255	92	0.36	110	43%
体力UPコース	10	10	20	400	302	0.76	348	87%	
卓球	7	7	14	423	416	0.98	453	107%	
野球	2	2	4	120	60	0.50	70	58%	
陸上競技	1	1	2	60	19	0.32	21	35%	
日 吉 合 計	143	137	280	7840	7055	0.90	6498	83%	
三田地区開設	ダンス	2	2	4	80	61	0.76	62	78%
	テニス	5	5	10	132	127	0.96	127	96%
	バレーボール	2	2	4	100	34	0.34	35	35%
	フットサル	1	1	2	50	49	0.98	49	98%
	弓術	2	2	4	80	89	1.11	89	111%
	剣道	2	2	4	80	29	0.36	29	36%
	合気道	1	1	2	60	47	0.78	53	88%
	柔道	2	2	4	120	43	0.36	43	36%
三 田 合 計	17	17	34	702	479	0.68	487	69%	
全 体 合 計	160	154	314	8542	7534	0.88	6985	82%	

表Ⅲ-1-5. 平成16年度 体育実技A・B（シーズンスポーツクラス）担当者及び履修状況

	月	科目名	担当者	定員	登録数	倍率	履修者数	充足率
春 学 期	7 月	空手	蓮池 陽輔	40	19	0.48	25	63%
		弓術	上山 幸一	40	59	1.48	43	108%
		少林寺拳法	中島 正樹	30	12	0.40	16	53%
		水泳	峰岸 克行	50	30	0.60	35	70%
		軟式野球	小松 恭三	40	31	0.78	33	83%
		馬術（B）	中村 護	40	43	1.08	41	103%
		山岳（B）	岩永 治朗	50	12	0.24	14	28%
		ヨット（B）	井上 進	40	25	0.63	25	63%
秋 学 期	9 月	アウトドアレクリエーション（B）	野口 和行	50	33	0.58	34	78%
		器械体操	首藤 聡史	30	19	0.63	24	80%
		端艇	月村 繁雄	20	15	0.75	15	75%
		バレーボール（B）	石手 靖	30	26	0.87	29	97%
	2 月	スキー（B）	吉田 久男	160	44	0.28	52	33%
		スケート（B）	小山 正	40	27	0.68	29	73%
計				660	395	0.60	415	63%

2. 授業評価の実施

体育研究所では、より適切な授業展開のための基礎資料を得ることを目的に、体育実技を履修した学生による授業評価を実施している。その結果を春学期ウィークリー種目、秋学期ウィークリー種目、秋学期講義・演習、シーズン種目に分けて示した。アンケートの回答数及び新旧アンケートの質問項目を表Ⅲ-1-6、表Ⅲ-1-7に示す。

アンケートの各質問項目には、「強くそう思う」5点から「まったくそう思わない」1点までの5段階評価とした。春学期と秋学期では、質問項目や回収方法が異なっているた

め、春学期、秋学期、シーズンに分けて結果を図表化し、併せて回収方法の違いによる授業評価の変化についても考察を試みる。

表Ⅲ-1-6. アンケート回答者数

	アンケート総数
春学期ウィークリー	2534
秋学期ウィークリー	2253
秋学期講義・演習	45
シーズン	250

表Ⅲ-1-7. 新旧授業評価アンケートの質問項目

平成16年度春学期（旧アンケート）	平成16年度秋学期（新アンケート）
5段階評価	5段階評価
<ol style="list-style-type: none"> 1. 授業の目的・目標はよく理解できた 2. 教員の教授方法は適切であった。 3. 教員はこの授業についての十分な知識を持っていた 4. 授業の内容は興味のあるものだった 5. 運動量は十分であった 6. 教員の授業に対する準備は十分であった 7. 授業において教員とのコミュニケーションはよく取れた 8. 授業において、学生間のコミュニケーションはよく取れた 9. 自分はこの授業に意欲的に取り組んだ 10. この授業は自分にとって満足出来るものであった 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 教員は授業の目的及び目標をわかりやすく説明した 2. 教員の指導・教授方法は適切であった 3. 教員はこの授業についての十分な知識を持っていた 4. 教員は授業への学生の参加を促し、適切に助言した 5. 教員の話し方は聞き取りやすかった 6. この授業は塾生にとってふさわしいものだった 7. この授業は自分にとって満足できるものだった 8. この授業によって知識を深めることができた 9. この授業の内容は興味のあるものだった 10. このクラスの雰囲気は良好であった
<ol style="list-style-type: none"> 11. 体育実技 A と体育実技 B の違いを知っていましたか。(はい/いいえ) 12. ガイダンス時に各教員から成績評価基準の説明を受け、それを理解しましたか。(はい/いいえ/ガイダンスに出ていない) 13. あなたがこの種目を選択したときに、評価方法の違いを考慮に入れましたか。 	<ol style="list-style-type: none"> 11. 自分はこの授業に意欲的に取り組んだ 12. この授業は健康や体力の向上に役立った(実技のみ) 13. この授業によって運動技術が向上した(実技のみ) 14. 運動量は適切であった(実技のみ) 15. この授業では配布資料やプレゼンテーションが適切であった(講義・演習のみ)
自由記述項目	自由記述項目
履修手続き、授業内容、教員、教授法などについて	授業内容について(よかったこと/改善を要すること) 教員について(よかったこと/改善を要すること) 施設及び機器・用具等について(よかったこと/改善を要すること) 体育科目全般に関する意見及び提案

1) 春学期実施科目(ウィークリー)の授業評価

春学期ウィークリー科目における各項目の全体の平均値と標準偏差を図Ⅲ-1-1に示す。

例年と同じように全般に4点以上の肯定的評価がほとんどであった。また、施設や用具、雨天時におけるプログラムに関する得点がやや低かった。

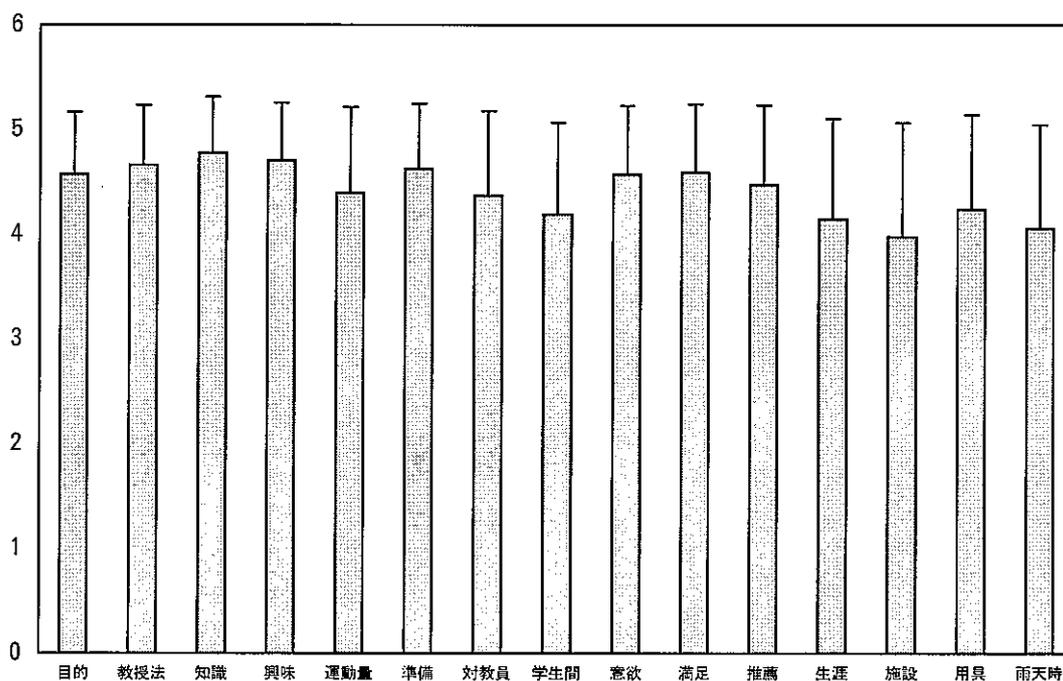
また、カリキュラムの改定に当たり、新たに3つの質問項目を増やした。その結果を図Ⅲ-1-2、図Ⅲ-1-3、図Ⅲ-1-4に示す。

「⑩体育実技 A、B の違いを知っていたか」という質問に対しては、4割の学生が「いいえ」と答えている。これは、2年生以上の学生への周知が徹底していなかったことが要因と考えられ、来年度以降の対応が必要と考えられる。

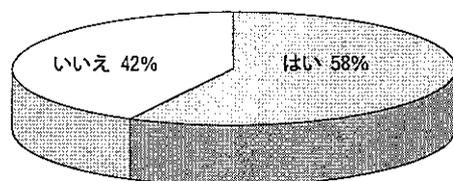
「⑫教員から成績評価基準の説明を受け、それを理解したか」という質問に対しては、

「はい」と答えた学生が、67%にのぼった反面、「ガイダンスウィークに出していない」という学生も26%あった。2年生以上はガイダンスウィークに出席せずに履修申告する場合も多く、ガイダンス時だけでなく、授業時にも成績評価についての説明を行う必要があると思われる。

「⑬履修するにあたって評価方法の違いを考慮に入れたか」という質問に対しては、8割近くの学生が「いいえ」と答えている。このことから、学生は自分の興味や関心に応じた種目を、評価方法よりも重視している傾向が見受けられる。ただし、理工学部では体育実技 B が自由科目のみの履修となっており、特集で述べたように、体育実技 B の科目の履修率が若干低い傾向にある。カリキュラム改定による体育科目における成績評価のあり方を学生に周知徹底していく必要があると考えられる。

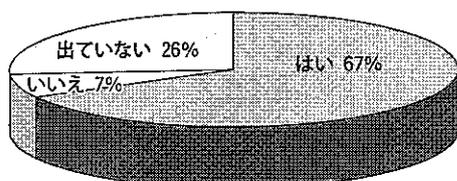


図Ⅲ-1-1. 授業に関する質問項目別の5段階評価(春学期ウィークリー全体平均)



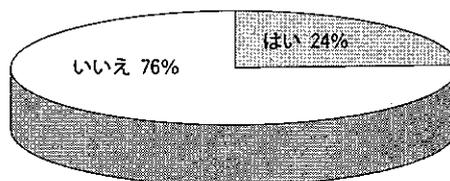
図Ⅲ-1-2.

体育実技AとBの違いを知っていたか？



図Ⅲ-1-3.

教員から成績評価基準の説明を受け、それを理解したか？



図Ⅲ-1-4.

評価方法の違いを考慮に入れたか？

2) 秋学期実施科目（ウィークリー）の授業評価

秋学期ウィークリー科目における各項目の全体の平均値と標準偏差を図Ⅲ-1-5に示す。また、講義・演習科目についても授業評価アンケートを行った。その結果を図Ⅲ-1-6に示す。

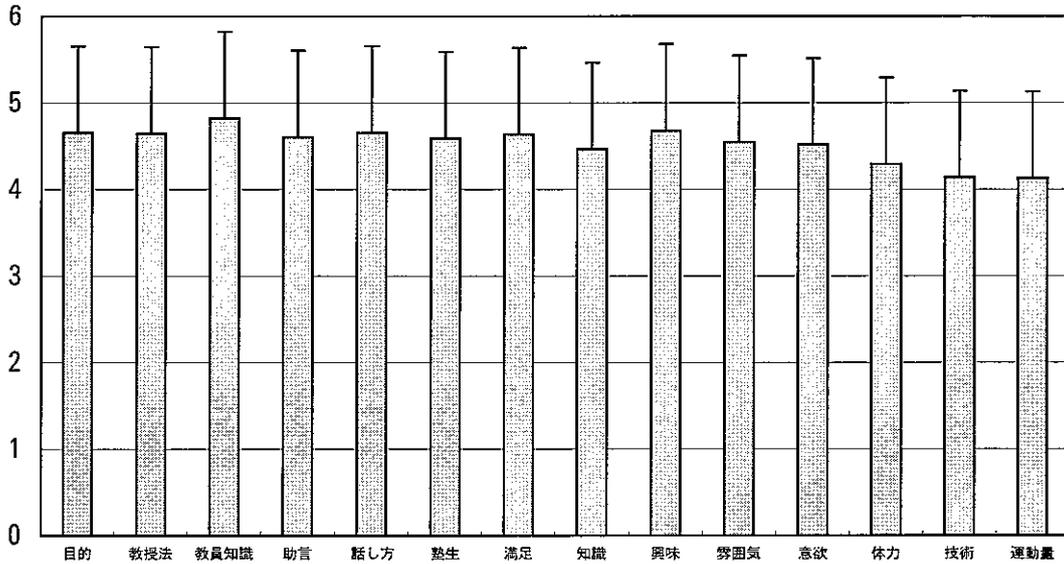
回収方法の変更（教員が配布、回収→学生が配布・回収）から、学生がより率直な評価をし、実技の授業評価については得点が若干低下すると予想していたが、どの質問項目も4点以上の高い評価を得ていた。今後さらにデータを蓄積し、教員のFDに役立てていきたいと考える。

3) シーズン科目の授業評価

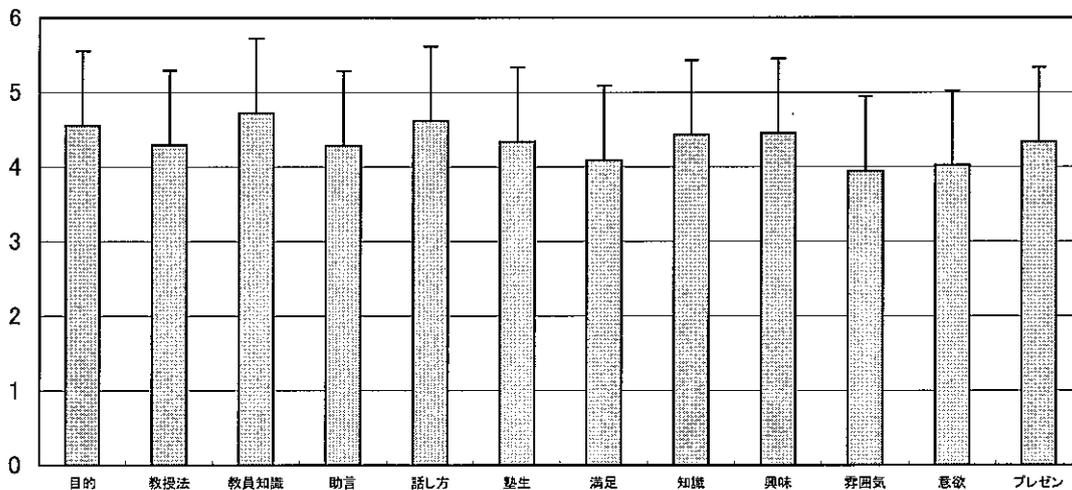
シーズン科目（スキー、スケートは質問項目が異なるため除く）における各項目の全体の平均値と標準偏差を図Ⅲ-1-7に示す。

4) 種目別の5段階評価

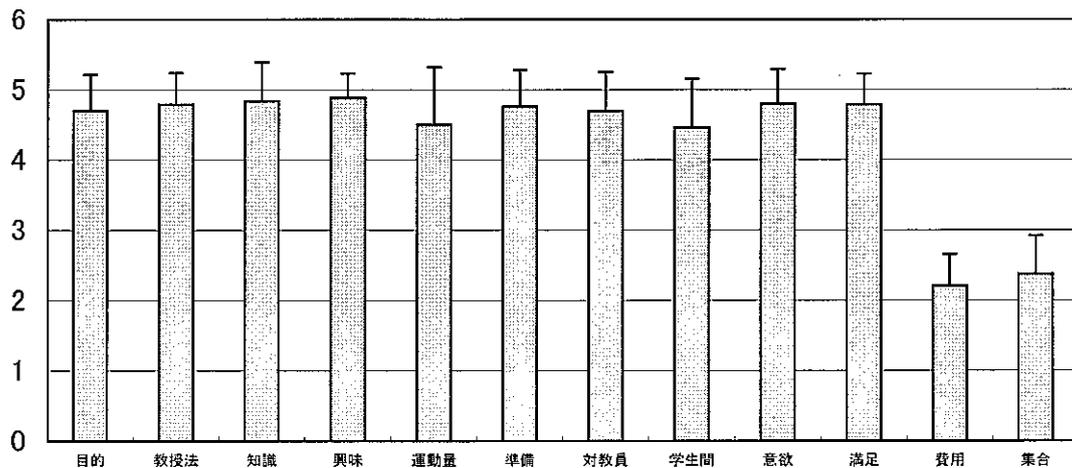
春学期ウィークリー科目、秋学期ウィークリー科目、夏季休業中実施のシーズン科目、春季休業中実施のシーズン科目における種目別の5段階評価の集計一覧を表Ⅲ-1-8、表Ⅲ-1-9、表Ⅲ-1-10、表Ⅲ-1-11に示す。



図Ⅲ-1-5. 授業に関する質問項目別の5段階評価（秋学期ウィークリー全体平均）



図Ⅲ-1-6. 授業に関する質問項目別の5段階評価（秋学期講義・演習の全体平均）



図Ⅲ-1-7. 授業に関する質問項目別の5段階評価（シーズン・夏季休業実施種目全体平均）

表Ⅲ-1-8. 種目別の5段階評価集計一覧(春学期ウィークリー)

種目名	人数		目的	教授法	知識	興味	運動量	準備	対教員	学生間	意欲	満足
アーチェリー	16	平均	4.4	4.6	4.9	4.9	4.2	4.8	4.6	3.8	4.8	4.8
		S D	0.6	0.5	0.3	0.3	0.8	0.4	0.5	0.8	0.4	0.4
合気道	46	平均	4.8	5.0	5.0	5.0	4.5	5.0	4.9	4.8	4.8	4.9
		S D	0.4	0.0	0.0	0.2	0.9	0.1	0.3	0.5	0.4	0.4
アメリカンタッチフットボール	11	平均	4.7	4.9	4.9	4.9	4.5	4.8	4.7	4.6	4.5	4.9
		S D	0.5	0.3	0.3	0.3	0.7	0.6	0.5	0.5	0.7	0.3
ウォーキングエクササイズ	39	平均	4.4	4.6	4.7	4.3	4.4	4.6	4.3	3.9	4.3	4.4
		S D	0.7	0.7	0.6	0.9	0.8	0.6	0.9	0.9	0.8	0.8
エアロビクス	168	平均	4.6	4.9	4.8	4.8	4.7	4.8	4.3	3.8	4.7	4.8
		S D	0.5	0.5	0.6	0.5	0.6	0.4	0.7	1.0	0.5	0.4
弓術	33	平均	4.7	4.7	5.0	4.9	3.6	4.6	4.5	4.4	4.5	4.8
		S D	0.5	0.5	0.2	0.3	1.0	0.6	0.7	0.7	0.8	0.4
剣道	55	平均	4.7	4.9	5.0	4.8	4.4	4.8	4.6	4.4	4.6	4.7
		S D	0.6	0.4	0.1	0.4	0.8	0.4	0.6	0.7	0.6	0.5
ゴルフ	66	平均	4.5	4.5	4.9	4.7	4.1	4.6	4.3	3.7	4.6	4.6
		S D	0.5	0.5	0.4	0.5	0.9	0.5	0.7	1.1	0.6	0.5
サッカー	284	平均	4.4	4.5	4.7	4.7	4.6	4.5	4.1	4.1	4.5	4.5
		S D	0.7	0.6	0.6	0.5	0.7	0.7	0.9	0.9	0.8	0.7
柔道	55	平均	4.7	4.8	5.0	4.8	4.7	4.8	4.9	4.5	4.5	4.7
		S D	0.5	0.4	0.1	0.4	0.6	0.5	0.4	0.7	0.7	0.5
ジョギング	39	平均	4.6	4.8	4.7	4.5	3.9	4.2	4.4	4.0	4.4	4.4
		S D	0.5	0.4	0.5	0.5	1.0	0.6	0.7	0.8	0.5	0.5
水泳	80	平均	4.7	4.9	4.9	4.8	4.6	4.8	4.8	4.5	4.8	4.9
		S D	0.4	0.3	0.4	0.5	0.6	0.4	0.5	0.7	0.5	0.3
ソフトテニス	16	平均	4.4	4.7	4.8	4.8	4.6	4.8	4.9	4.4	4.9	4.8
		S D	0.5	0.5	0.4	0.4	0.7	0.4	0.3	0.8	0.3	0.4
ソフトボール	116	平均	4.6	4.8	4.8	4.8	4.5	4.7	4.6	4.5	4.7	4.8
		S D	0.7	0.5	0.5	0.4	0.8	0.5	0.6	0.7	0.5	0.5
体カアップ	144	平均	4.7	4.7	4.7	4.6	4.4	4.6	4.4	3.8	4.5	4.5
		S D	0.5	0.5	0.6	0.6	0.7	0.6	0.8	1.0	0.7	0.6
卓球	172	平均	4.5	4.4	4.4	4.6	4.2	4.5	4.2	4.4	4.7	4.6
		S D	0.7	0.8	0.9	0.7	0.9	0.8	0.9	0.8	0.6	0.6
ダンス	62	平均	4.6	4.6	4.9	4.7	4.4	4.7	4.3	4.3	4.6	4.6
		S D	0.6	0.8	0.6	0.7	0.8	0.6	1.0	0.8	0.6	0.6
テニス	213	平均	4.5	4.6	4.8	4.7	4.3	4.6	4.3	4.1	4.6	4.6
		S D	0.6	0.6	0.5	0.6	0.9	0.6	0.8	1.0	0.6	0.7
トランポリン	19	平均	4.6	4.9	4.9	4.9	4.3	4.8	4.9	4.6	4.8	4.9
		S D	0.7	0.3	0.2	0.2	0.9	0.4	0.3	0.5	0.5	0.2
ニュースポーツ	26	平均	4.4	4.6	4.7	4.5	3.8	4.4	4.7	4.5	4.3	4.6
		S D	0.8	0.6	0.5	0.8	1.1	0.8	0.5	0.6	0.8	0.6
バスケットボール	264	平均	4.8	4.8	4.9	4.8	4.8	4.8	4.6	4.4	4.7	4.8
		S D	0.5	0.5	0.4	0.6	0.6	0.6	0.7	0.7	0.6	0.6
バドミントン	232	平均	4.6	4.7	4.8	4.8	4.7	4.7	4.5	4.5	4.7	4.8
		S D	0.6	0.5	0.5	0.4	0.6	0.5	0.7	0.7	0.5	0.4
バレーボール	256	平均	4.5	4.7	4.8	4.8	4.5	4.7	4.7	4.6	4.7	4.7
		S D	0.6	0.5	0.4	0.4	0.8	0.6	0.6	0.7	0.6	0.5
ハンドボール	38	平均	4.7	4.7	4.9	4.9	4.8	4.8	4.7	4.7	4.8	4.7
		S D	0.5	0.5	0.3	0.3	0.4	0.4	0.5	0.6	0.5	0.5
フェンシング	10	平均	4.8	5.0	5.0	5.0	5.0	4.8	4.9	4.6	4.7	5.0
		S D	0.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.4	0.3	0.7	0.5	0.0
フットサル	78	平均	4.5	4.7	4.8	4.8	4.6	4.7	4.5	4.1	4.6	4.7
		S D	0.7	0.5	0.4	0.5	0.7	0.5	0.8	1.0	0.6	0.5
フライングディスク	18	平均	4.6	4.8	4.8	4.9	4.8	4.6	4.6	4.6	4.8	4.9
		S D	0.5	0.4	0.4	0.4	0.4	0.6	0.8	0.5	0.4	0.4
野球	15	平均	4.5	4.7	4.9	4.7	4.3	4.6	4.4	4.4	4.5	4.4
		S D	0.8	0.5	0.4	0.5	0.8	0.6	0.6	0.7	0.7	0.7
陸上競技	6	平均	4.3	4.3	4.0	4.2	4.0	4.0	4.3	4.0	4.2	4.0
		S D	0.5	0.5	1.7	1.0	0.6	0.9	0.5	0.9	1.0	0.6

表Ⅲ-1-9. 種目別の5段階評価集計一覧(秋学期ウィークリー)

種目名	人数		目的	教授法	教員知識	助言	話し方	塾生	満足	知識	興味	雰囲気	意欲	体力	技術	運動量
テニス	231	平均	4.7	4.6	4.9	4.5	4.5	4.7	4.7	4.5	4.7	4.5	4.5	4.5	4.5	4.2
		SD	0.6	0.7	0.4	0.8	0.9	0.6	0.7	0.7	0.6	0.8	0.8	0.7	0.8	0.8
バスケットボール	251	平均	4.7	4.7	4.8	4.7	4.8	4.7	4.7	4.4	4.7	4.7	4.6	4.8	4.4	4.5
		SD	0.5	0.5	0.4	0.5	0.5	0.6	0.6	0.8	0.6	0.6	0.7	0.5	0.8	0.7
フットサル	61	平均	4.6	4.8	4.9	4.8	4.9	4.7	4.7	4.3	4.8	4.5	4.7	4.6	4.4	4.4
		SD	0.6	0.5	0.4	0.5	0.4	0.7	0.7	1.0	0.6	0.7	0.7	0.8	1.0	0.9
バドミントン	216	平均	4.6	4.6	4.8	4.6	4.6	4.6	4.6	4.4	4.6	4.6	4.6	4.3	4.2	4.3
		SD	0.5	0.6	0.5	0.7	0.6	0.6	0.6	0.8	0.6	0.7	0.5	0.8	0.8	0.7
エアロビクス	165	平均	4.8	4.9	4.9	4.7	4.8	4.8	4.8	4.6	4.8	4.7	4.8	4.7	4.1	4.6
		SD	0.4	0.3	0.6	0.6	0.4	0.4	0.4	0.6	0.5	0.5	0.4	0.5	0.8	0.6
野球	14	平均	4.5	4.4	4.7	4.4	4.5	4.2	4.4	4.1	4.6	4.4	4.1	4.3	4.4	4.1
		SD	0.8	0.8	0.6	0.7	0.7	0.8	0.8	0.9	0.6	0.8	1.1	0.8	0.6	0.9
体力UPコース	113	平均	4.8	4.7	4.8	4.6	5.0	4.4	4.6	4.6	4.6	4.2	4.5	4.5	3.9	4.0
		SD	0.4	0.6	0.4	0.5	2.7	0.7	0.6	0.6	0.5	0.8	0.6	0.5	0.7	0.8
サッカー	222	平均	4.5	4.5	4.7	4.6	4.8	4.6	4.5	4.0	4.6	4.4	4.5	4.5	4.1	4.3
		SD	0.8	0.8	0.5	0.7	0.5	0.6	0.8	1.1	0.7	0.9	0.8	0.7	1.0	0.9
卓球	152	平均	4.6	4.5	4.6	4.5	4.6	4.4	4.5	4.2	4.5	4.5	4.5	4.0	4.1	4.0
		SD	0.6	0.6	0.6	0.7	0.6	0.8	0.8	1.0	0.6	0.7	0.7	1.0	1.1	1.0
柔道	40	平均	4.8	4.8	5.0	4.8	4.8	4.8	4.7	4.8	4.8	4.8	4.6	4.6	4.5	4.6
		SD	0.6	0.5	0.2	0.5	0.7	0.5	0.6	0.5	0.5	0.4	0.8	0.6	0.8	0.7
トランポリン	21	平均	4.9	4.9	5.0	5.0	4.9	4.9	4.9	4.9	4.9	5.0	5.0	4.7	4.5	4.5
		SD	0.4	0.4	0.2	0.2	0.4	0.5	0.5	0.4	0.3	0.0	0.0	0.5	0.7	0.7
水泳	8	平均	4.8	4.6	4.8	4.8	4.4	4.4	4.8	4.6	4.9	4.0	4.0	4.4	4.3	4.1
		SD	0.7	0.5	0.7	0.5	0.5	0.7	0.5	0.5	0.4	1.2	0.8	0.7	0.9	0.8
弓道	21	平均	4.8	4.8	5.0	4.3	4.7	4.7	5.0	4.8	5.0	4.7	4.7	3.8	4.0	4.3
		SD	0.4	0.4	0.2	0.6	0.6	0.6	0.2	0.4	0.2	0.6	0.7	1.0	0.7	0.9
ウォーキングエクササイズ	31	平均	4.5	4.3	4.9	4.3	4.7	4.2	4.1	3.7	4.0	4.0	4.1	3.9	2.8	3.8
		SD	0.6	0.6	0.4	0.8	0.5	0.8	0.9	1.0	1.0	0.9	0.9	1.0	0.8	1.1
ライフセービング	7	平均	4.7	4.7	4.9	4.6	4.6	4.7	4.6	4.9	4.7	4.7	4.1	5.0	3.5	3.0
		SD	0.5	0.5	0.4	0.5	0.8	0.5	0.5	0.4	0.5	0.5	1.5	0.0	1.0	1.6
フェンシング	9	平均	4.7	4.9	5.0	4.8	4.6	4.9	4.8	4.8	5.0	4.9	4.9	4.6	4.8	4.6
		SD	0.7	0.3	0.0	0.4	0.7	0.3	0.4	0.7	0.0	0.3	0.3	0.5	0.4	1.0
ソフトボール	135	平均	4.5	4.6	4.8	4.6	4.8	4.6	4.7	4.2	4.7	4.6	4.7	4.3	4.1	4.2
		SD	0.7	0.7	0.5	0.7	0.5	0.7	0.6	0.9	0.6	0.8	0.6	0.9	0.9	0.9
ダンス	35	平均	4.2	4.1	4.8	4.4	4.2	4.4	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	3.6	3.8	3.7
		SD	0.8	0.8	0.5	0.8	0.9	0.7	0.6	0.7	0.6	0.7	0.6	0.9	1.0	1.0
バレーボール	197	平均	4.5	4.5	4.7	4.7	4.6	4.6	4.7	4.3	4.7	4.7	4.6	4.3	4.2	4.3
		SD	0.6	0.6	0.5	0.6	0.7	0.6	0.6	0.8	0.6	0.6	0.7	0.9	0.9	0.8
ゴルフ	76	平均	4.4	4.4	4.7	4.2	4.7	4.5	4.5	4.6	4.6	4.1	4.5	3.8	4.2	4.0
		SD	0.6	0.7	0.5	0.8	0.5	0.7	0.7	0.7	0.6	0.8	0.6	0.9	0.8	0.8
剣道	62	平均	4.7	4.7	4.9	4.6	4.7	4.7	4.7	4.7	4.8	4.4	4.4	4.2	4.1	4.1
		SD	0.5	0.5	0.5	0.6	0.6	0.6	0.5	0.5	0.5	0.8	0.8	0.8	0.9	0.9
ハンドボール	31	平均	4.6	4.7	4.9	4.6	4.6	4.6	4.4	4.4	4.5	4.5	4.4	4.6	4.5	4.5
		SD	0.7	0.5	0.3	0.6	0.6	0.7	0.9	0.8	0.7	0.6	0.8	0.6	0.7	0.7
自動車	16	平均	4.7	4.7	4.8	4.8	4.8	4.6	4.6	4.4	4.8	4.3	4.4	3.3	4.1	3.4
		SD	0.5	0.5	0.4	0.4	0.4	0.6	0.6	0.7	0.6	0.8	0.7	1.1	1.0	1.0
ニュースポーツ	26	平均	4.8	5.0	4.9	4.8	4.9	4.7	4.8	4.7	4.8	4.8	4.8	3.7	3.8	4.0
		SD	0.4	0.2	0.3	0.4	0.3	0.5	0.4	0.5	0.4	0.4	0.4	0.8	0.8	0.9
合気道	33	平均	4.8	4.9	5.0	4.9	5.0	4.8	4.8	4.8	4.9	4.8	4.5	4.5	4.2	4.2
		SD	0.5	0.3	0.0	0.4	0.0	0.6	0.4	0.4	0.3	0.5	0.6	0.6	0.8	0.9
アメリカンタッチフット	7	平均	5.0	5.0	4.9	4.7	4.6	4.9	4.9	4.7	4.9	4.7	4.7	4.6	4.4	4.3
		SD	0.0	0.0	0.4	0.8	0.8	0.4	0.4	0.5	0.4	0.5	0.5	0.5	0.8	0.8
ソフトテニス	17	平均	4.4	4.4	4.7	4.6	4.4	4.5	4.5	3.9	4.6	4.8	4.5	4.3	3.9	4.1
		SD	0.9	0.6	0.5	0.8	0.6	0.6	0.7	1.0	0.6	0.4	0.8	0.7	0.8	0.9
陸上	3	平均	4.3	4.3	5.0	4.3	4.0	3.7	4.3	4.7	4.0	4.0	4.3	3.7	4.0	3.3
		SD	0.6	0.6	0.0	0.6	1.0	1.2	0.6	0.6	1.0	1.0	0.6	1.2	1.0	1.5
ジョギング	9	平均	4.9	4.6	4.4	4.6	4.9	4.6	4.8	4.0	4.6	4.8	4.3	4.4	4.0	4.2
		SD	0.3	0.5	0.7	0.7	0.3	0.7	0.4	1.3	0.5	0.4	1.0	0.7	0.9	0.7
フライングディスク	19	平均	4.8	4.8	4.7	4.9	4.9	4.8	4.8	4.5	4.8	4.7	4.6	4.4	3.9	4.3
		SD	0.4	0.4	0.5	0.3	0.2	0.4	0.4	0.7	0.5	0.6	0.8	0.9	1.0	0.8
ボクシング	10	平均	4.7	4.7	4.7	4.4	4.4	4.7	4.6	4.4	4.6	4.5	4.6	4.6	4.7	4.5
		SD	0.7	0.7	0.7	1.1	0.7	0.7	0.7	0.7	0.7	0.7	0.7	0.8	0.7	0.8
アーチェリー	15	平均	4.9	4.7	4.9	4.5	4.7	4.6	4.5	4.5	4.7	4.5	4.6	3.9	4.2	3.7
		SD	0.4	0.5	0.4	0.5	0.5	0.7	1.1	0.6	0.5	0.5	0.5	0.8	0.9	1.0

表Ⅲ-1-10. 種目別の5段階評価集計一覧(夏季休業実施種目)

種目	人数		目的	教授法	知識	興味	運動量	準備	対教員	学生間	意欲	満足	費用	集合
アウトドアレクリエーション	31	平均	4.6	4.6	4.6	4.6	4.2	4.7	4.6	4.7	4.7	4.8	2.2	1.8
		S D	0.5	0.6	0.8	0.7	1.0	0.8	0.6	0.5	0.6	0.6	0.7	0.6
山岳	9	平均	4.7	4.8	4.9	5.0	4.7	4.9	4.7	4.6	4.7	4.8	2.0	2.6
		S D	0.5	0.4	0.3	0.0	0.7	0.3	0.5	0.7	0.5	0.4	0.0	0.5
バレーボール	21	平均	4.8	4.7	4.9	4.9	4.8	4.8	4.7	4.7	4.9	5.0	2.8	2.7
		S D	0.4	0.5	0.5	0.3	0.4	0.4	0.6	0.6	0.3	0.2	0.4	0.5
馬術	32	平均	4.7	4.8	4.8	4.8	3.8	4.5	4.7	4.4	4.8	4.7	1.8	2.4
		S D	0.6	0.6	0.7	0.4	1.0	0.9	0.6	0.9	0.6	0.6	0.7	0.6
器械体操/新体操	21	平均	4.7	5.0	5.0	5.0	4.7	4.8	4.7	4.1	4.9	4.8		
		S D	0.6	0.2	0.0	0.0	0.8	0.4	0.6	0.9	0.5	0.4		
弓道	35	平均	4.7	5.0	5.0	5.0	4.7	4.8	4.7	4.1	4.9	4.8		
		S D	0.5	0.3	0.7	0.4	0.8	0.3	0.6	0.5	0.6	0.3		
空手	16	平均	4.6	4.6	4.6	4.7	4.4	4.8	4.7	4.3	4.8	4.6		
		S D	0.5	0.6	0.9	0.6	1.0	0.4	0.5	0.8	0.4	0.5		
軟式野球	24	平均	5.0	4.9	5.0	5.0	4.9	4.9	4.8	4.7	4.9	4.9		
		S D	0.2	0.3	0.0	0.0	0.3	0.3	0.5	0.6	0.3	0.3		

表Ⅲ-1-11. 種目別の5段階評価集計一覧

種目名		目的	教授法	教員知識	助言	話し方	塾生	満足	知識	興味	雰囲気	意欲	体力	技術	運動量
スケート	平均	4.7	4.8	4.9	4.9	4.7	4.8	4.8	4.7	4.9	4.7	4.8	4.3	4.8	4.4
	S D	0.6	0.4	0.4	0.4	0.7	0.4	0.5	0.5	0.4	0.8	0.4	0.7	0.4	0.7
スキー	平均	4.5	4.6	4.8	4.6	4.8	4.7	4.8	4.6	4.8	4.6	4.8	4.7	4.7	4.5
	S D	0.8	0.6	0.5	0.7	0.5	0.6	0.5	0.6	0.5	0.6	0.4	0.5	0.5	0.7

3. ビジュアルシラバスの作成

大学教育委員会のもとに置かれた e-Learning 等検討小委員会において、Web シラバス・アーカイブの作成等が検討課題とされていたが、ITC（インフォメーションテクノロジーセンター）からの提案により、動画を Web で配信することを可能とするビジュアルシラバスを実験的に作成することとなった。

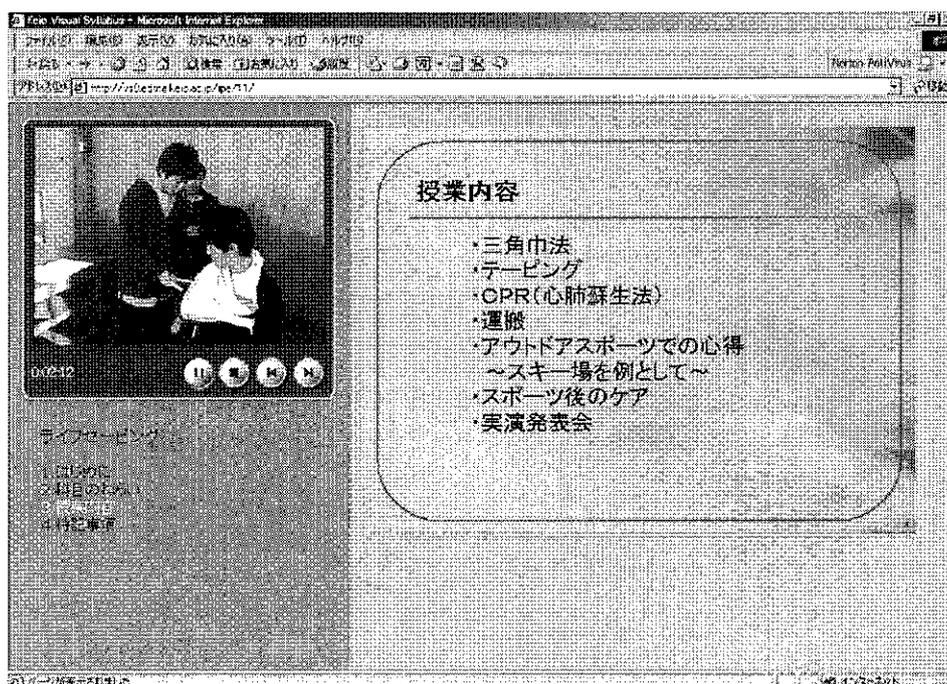
これを受けて、体育研究所では、広く所員からビジュアルシラバスへの参加を呼びかけた。その結果、体育科目全般の説明を含め、以下の種目のビジュアルシラバスが完成した。

- 1) 体育科目とは
- 2) 体育実技 A「剣道」 植田
- 3) 体育実技 A「剣道（日本剣道形）」 植田

- 4) 体育実技 A「剣道」 吉田
- 5) 体育実技 B「夏のバレーボール（シーズン）」石手
- 6) 体育実技 B「バレーボール」 石手
- 7) 体育学演習「バイオメカニクス」 佐々木
- 8) 体育実技 B「サッカー」 須田
- 9) 体育実技 B「アウトドアレクリエーション（シーズン）」野口
- 10) 体育実技 A「ニュースポーツ」 野口
- 11) 体育学演習「ライフセービング」 山内

以上のビジュアルシラバスは体育研究所の Web サイトの開設授業科目のページから入ることができる。

<http://www.hc.keio.ac.jp/ipe/>



4. 通信教育部対象の保健体育科目

1) 体育実技

通信教育部の学生を対象とした体育実技の授業を、平成16年7月31日（土）から8月7日（土）の日曜を除く7日間、日吉キャンパスにて午前中の2時間実施した。

各担当者及び履修者数を表Ⅲ-1-12に示す。

2) 体育理論・保健衛生

複数の教員によるオムニバス形式で実施した。各教員のテーマを表Ⅲ-1-13に示す。

また、今年度のレポート並びに試験問題の提出は、佐々木玲子、松田雅之、吉田泰将の3名が担当した。

表Ⅲ-1-12. 平成16年度通信教育部体育実技スクーリング開講種目および担当者一覧

	種目名	定員	履修者数	充足率	担当者
夏 期	剣道	30	12	40.0%	植田 史生
	柔道	30	5	16.7%	安藤 勝英
	ウォーキングエクササイズ	30	26	86.7%	近藤 明彦
	卓球	30	14	46.7%	松田 雅之
	バスケットボール	50	11	22.0%	加藤 大仁
	バレーボール	40	16	40.0%	石手 靖
	エアロビクス	60	51	85.0%	佐々木玲子
	ボールルームダンス	20	13	65.0%	篠原しげ子
	体力アップコース	20	18	90.0%	山内 賢
	サッカー	30	16	53.3%	須田 芳正
	水泳	50	18	36.0%	高嶺 隆二
	バドミントン	25	21	84.0%	加藤 幸司
	ソフトボール	25	19	76.0%	綿田 博人
冬期	スキー	70	35	50.0%	水野 英夫
	合計	510	275	53.9%	

表Ⅲ-1-13. 平成16年度通信教育部講義開講科目および担当者一覧

	担当者	テーマ
保 健 衛 生	斎藤 郁夫	高血圧
	河邊 博史	糖尿病
	和井内由充子	虚血性心疾患
	辻岡 三南子	医学とスポーツ
	徳村 光昭	
	南里 清一郎	エイズ
体 育 理 論	佐々木 玲子	人の成長と加齢に伴う身体機能の変化
	松田 雅之	オリンピックとスポーツ
	吉田 泰将	体力トレーニングの理論と実際

5. 新しい教養教育の実践

平成16年度より、日吉「予算管理部門内調整費」による「新しい教養授業の支援」事業が、開始され、体育研究所から2件の事業が採択された。以下にその報告をする。

1) スポーツと自然を通じた教養教育の実践

① 事業代表者氏名

石手 靖

② 主な事業参加者

野口和行、平田大輔、依田珠江

③ 事業目的の概要

この事業の目的は、塾生としての意識を高めることにある。大学とはさまざまな個性を持つ学生・教職員が互いに刺激し合い、それぞれの潜在的才能を育てる場と考えている。つまり、人を見つめ自分を発見するのである。

このことがキャンパス内で充分であるかと考えるとそうとはいえない。授業、ゼミナール、研究室、図書館等での触れ合いのほかに、レクリエーショナルなプログラムは少ない。また塾生において特にスポーツ実践の環境は著しく悪い。体育会は専用の施設を持ってはいるが、塾生全体を視野におけば体育の授業やスポーツイベントはあるものの、自由な発想を持って自発的にスポーツ活動を行うことのできる場はキャンパスにはない。

このような施設不足の現状のなかで、より効果的にスポーツの持つ効用を生かす教育の場としては、ゆとりのある新鮮な空間及び環境下でのスポーツ実践が望ましいと考える。また、集団生活から学ぶことは今の塾生に必要なのである。

④ 事業計画

当初計画

日程：平成16年8月29日(日)～9月2日(木) 4泊5日

場所：新潟県妙高高原

宿泊先：慶應義塾大学医学部赤倉山荘

募集学生数：30名

参加費：28,000円(宿泊代及び交通費等)

概要：

第1日目(8/29)

朝出発・14時現地集合／

事業説明及び登山準備

第2日目(30)

妙高山登山(8:00～15:00)／

環境に関するセミナー／懇親会

第3日目(31)

午前バレーボール(町営体育館)

午後テニス(隣接テニスコート)

第4日目(9/1)

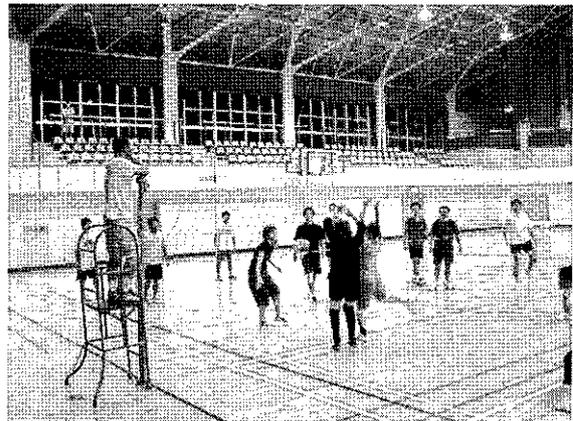
午前バレーボール(町営体育館)

午後テニス(隣接テニスコート)／

意見発表会

第5日目(2)

午前自由／昼現地解散・帰京



⑤ 申請書の計画から変更した箇所と変更理由

30名の学生を募集したが、結果6名の学生参加であった。

2日目の妙高山登山は悪天候のため中止し、体育館にてバレーボール等を行った。

3日目の夕食後、地元家庭婦人バレーボールチームとの親睦試合を行った

⑥ 成果

まず本事業の目的である参加者の塾生と

しての意識を高めることについては、大変に満足のいく結果であったと思われる。応募学生数が少なかったことを受けて卒業生に声を掛け数名の参加者を得た。そのことにより多様な会話が充実し塾生にとっては印象的な合宿となった。

また慶應義塾の施設である赤倉山荘の利用によって管理人である望月光男氏のご理解もあって、妙高高原の自然や新瀨の風土、登山の楽しみ方などの貴重なお話を聞く機会も得て大変に有意義であった。そして地域の方々との交流として町内の家庭婦人バレーボールチームとの親睦試合が叶い、楽しいときを過ごした。参加教員も個々の得意分野において、スポーツ実践によるコミュニケーションを重視しながら技術の向上をも実践した。

新しい仲間とスポーツと自然を満喫したゆとりある時間をなった。

⑦ 今後の展望・計画

さまざまなスポーツを取り入れて活動内容を工夫し、夏期のみならず冬期の実施も考えていきたい

⑧ 問題点

本事業は第2次募集に伴う採択であったため、採択決定日（2005/7/8）より事業実施日の間に十分な時間がなく、また試験期間にも入りホームページを作成したが十分な広報活動とはならなかった。したがって準備期間を考慮すると、次年度実施可も視野に入れるべきとも思う。

また、天候に左右される企画ゆえ、その対応が必要。また実施時期も比較的天気の良い可能性の高い時期が望ましい。

2) 本物に触れる、頭と身体で学ぶ伝統芸能（演習）授業

- ① 事業代表者氏名 森田（小林）ゆい
- ② 主な事業参加者 佐々木玲子、稲田奈緒美（理工学部「身

体文化論」・非常勤講師）、小菅隼人（理工学部・助教授）事業協力者

③ 事業目的の概要

我が国には多くの伝統芸能が存在するが、それらは比較的限られた人々によって伝承され守られてきた。そのため諸外国と比べて我が国では、一般に伝統芸能と身近に接している人は少ないように思われる。このような現状の中、国際化社会が進むにつれて、まずは自国の文化を知ることが大切であるという発想から、小、中、高等学校の教育現場において鑑賞会などで本物に触れるのと同時に、実際に児童生徒が伝統芸能を体験的に学習し、演ずることの試みが近年いくつかの学校で行われるようになってきた。しかしながら大学における伝統芸能の学習には変化がみられず、文学、歴史的なアプローチが中心であり、鑑賞会、さらには体験的に学ぶ学習を進めている学校は少ない。

伝統芸能をワークショップなどで体験した人の感想に「今まで意識下にあった日本人の動きを“自分の身体が知っていた”ことに驚いた」と語られることがあるが、伝統芸能には、暗黙知や身体知を体感する可能性を持つ教材としての魅力も備えていることが考えられる。また、体験および知的背景を得た後に本物に触れる鑑賞会には、長く将来に渡っての伝統芸能の楽しみ方を身に付ける機会となることが期待出来る。

そこで本事業では、将来の国際化社会をリードしてゆく塾生に、自国の文化を教育の場で知識として知ると同時に身体を通して体感する、さらに本物に触れる授業を開講することを目的とした。

④ 事業計画

当初計画

期間：秋学期（10月23日開始）

時間：原則として土曜日1、2時限。講義1回、ワークショップ3回。

定員：能楽、文楽、日本舞踊コースに分
かれ、各コース20名（重複可能）
対象とする芸能：能楽、文楽、日本舞踊
（歌舞伎）

内容：

- ① 知識として学ぶ講義授業1日（2コマ分）
・イントロダクション、身体文化論、身体
技法論的背景
- ② 身体を通して学ぶ体験授業（第一線で活
躍する演者に依頼する）
・能楽・文楽・日本舞踊 ワークショップ
各1回ずつ
- ③ 本物に触れる鑑賞会
・能楽・文楽・日本舞踊 各鑑賞会参加
各1回ずつ

体験授業講師

能楽：社団法人 能楽協会 教育特別委員
（委員会代表者）

文楽：財団法人 文楽協会（教育普及関
係窓係 吉田勘弥：文楽協会技芸員）

日本舞踊：西原和総合舞踊研究所（代表
西原和：柳流本部役員 教育部門担当）

会場：講義：教室。

体験授業：体育研究所エクササイズスタ
ジオを検討。

鑑賞会：国立能楽堂、国立劇場等の公演
を鑑賞するものとする。

- ⑤ 申請書の計画から変更した箇所と変更理
由

特に変更箇所なし。参加人数も予約の時
点で、各コースとも20名の定員を満たした。
（各コース重複可能であったため、実際の
参加人数は39名であった）

なお、実施日時、場所は下記のとおりで
ある。

スケジュール

・講義 10月23日（土）9:00～12:15

「古典芸能入門」小林ゆい

「身体文化論 西洋と東洋の舞踊の身体」

稲田奈緒美（非常勤講師）

「身体技法論」体育研究所教授 佐々木
玲子

・体験教室

場所：体育研究所

狂言：11月1日（月）16:30～19:30

日本舞踊：11月13日（土）9:00～12:15

文楽：12月4日（土）9:00～12:15

・鑑賞会

狂言：11月27日（土）13:30～

国立能楽堂



歌舞伎：11月14日（日）11:00～

歌舞伎座

文楽：12月11日（土）17:00～

国立劇場



- ⑥ 成果

本事業の目的は、将来の国際化社会を
リードしてゆく塾生に、自国の文化を教育
の場で知識として知ると同時に身体を通し
て体感する、さらに本物に触れる授業を開
講することを目的としたが、無事に授業は
開講されたため、その目的は達成出来た。

本事業では、各コース終了後に手書きの

アンケート調査、全コース終了後にメールによるアンケート調査を行った。

いずれのアンケート結果も、各自なりの伝統芸能との関わり方を体得出来たような充実感が伺えるものが多く、また今後も積極的に伝統芸能と関わろうとする姿勢が感じられた。

さらに、予想外の事象として、受講者の中には就職活動の自己アピールに本経験をを用いることを希望し、その後に担当教員への伝統芸能に関するメールによる問い合わせや授業風景の写真を求める学生が数名現れた。

また、体験授業の講師らからの感想として「こんなに熱心な学生さんに芸を伝えられることは楽しい」といずれの先生方も本受講生の熱心さに感激、さらに授業の今後の継続を強く求められた事実があった。実際にいずれの授業も単位認定外の授業であったにも関わらず、受講生の態度は非常に優れ、集中度が高く、熱気にあふれていた。これは、本講座に講師として迎えることの出来た特に実演家らが魅力あふれる第一線で活躍される先生方であったことにも起因すると思われる。

⑦ 今後の展望・計画

残念ながら、今回開講したような伝統芸能の授業を永続的に開講できる可能性は、経費の問題、そして事業代表者の退職などから、少ないように思われる。

しかし、一般教養の授業の一環として、日本の伝統芸能について講義および体験授業を(講師レベルを落とす等の対応も可能)数回行い、受講生が各自で公演鑑賞へ行く形式を取れば、それ程の経費は必要とせず、同様の講義→体験→鑑賞の形式を持つ授業を通常の授業として成立させられる可能性は十分にあるように思われる。また、このような授業を開講させるためのバックアップ活動を行っている NPO 団体の支援を用

いることも可能である。

また提案として、伝統芸能のみならず様々なジャンルにおいて、同様の形式の授業も成立可能ではなからうか。学生のアンケート希望調査によると、舞踊(フラメンコ、バレエ等)に加えて、舞台芸術全般、美術(工芸も含む)関係、音楽関係、ボランティア、国際交流などの記述がみられた。

【提案】

今回開講した感想として、現代の大学教育において、学生に自らの身体を用いて体感させる形式の授業が、単に受講内容についてのみならず、実は各自を取り巻く様々な知識および自己アイデンティティの確認等についても非常に有効的な効果を発揮することが授業現場およびその感想から感じ取れた。

今後、日吉キャンパスとして、すでに身体知についてのアプローチは行われているが、実際の身体の体験という要素を含めた授業数を増やしてゆくことが出来ないであろうか?このことを本開講経験からは是非強く提案したい。おそらく、様々な要素で想像以上の学習効果が得られるものと推測する。

Ⅲ-2 スポーツイベントの開催

1. 塾長杯・塾内競技大会

1) 塾長杯フットサル大会

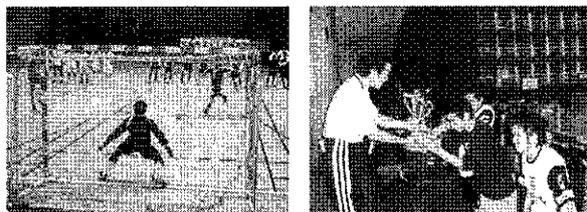
1. 開催日：平成16年5月22日（土）
2. 会場：日吉記念館
3. 開催時間：11:00～19:20（受付・開会宣言～閉会宣言）
4. 参加チーム数：32チーム
5. 参加者数：約400名（登録選手数307名、観客約100名）
6. ゲーム数：56ゲーム（1ゲーム15分間）
1チームのゲーム数：最低3・最高6ゲーム
7. 協力：大会実行学生スタッフ／放送研究会（K-Sound）／チア&ソングリーダーズユニコーンズ／大塚製薬（株）
8. 参加チーム抽選会：平成16年5月15日（土） 15:00～16:15 90番教室
9. 応募チーム数：137チーム
10. 結果
優勝：Public Voice（三輪光信：商4）
準優勝：ガンな一ず（平尾彰浩：理工2）
第3位：てんぐ（新倉理人：環情3）
同：チームリオ（宮本悠太：経3）
11. コメント：塾長杯フットサル大会の人气が益々高まってきたことを感じた。5月6日～10日の申込期間における大会参

加申込は137チームに達した。はじめて各チームの代表者を集め抽選会を実施したが、チームメンバーを含め約200名の学生が「大会に是非とも参加したい」の思いを込め抽選に臨み、歓喜する者あり、落ち込む者あり、またひとつ大会の楽しい場面が増えた。

大会当日は抽選で選ばれたにもかかわらず技術レベルの高いチームが集まり熱戦を繰り広げた。

例年大会を盛り上げてくれているユニコーンズのダンスも参加者に定着し、明るい演技を見せてくれた。また彼女達もメンバーが非常に増加し迫力を増した。放送研究会によるアナウンス、慶應塾生新聞会による取材など塾生それぞれの得意とする分野を生かした大会が形成された。

主催者側の主旨を理解し、「大会に参加したい」という意欲あふれる塾生をなんとか全員出場させたいものである。



2) 塾長杯バレーボール大会

1. 開催日：平成16年6月20日（日）
2. 会場：日吉記念館
3. 開催時間：8:45～17:30
4. 参加チーム数：41チーム（最強リーグ16、一般リーグ25）
5. 参加者数：約600名（登録選手数492名、観客数約100名）
6. ゲーム数：73ゲーム

1チームのゲーム数：最低3・最高6ゲーム

7. 協力：大会実行学生スタッフ／放送研究会（K-Sound）／チア＆ソングリーダーズユニコーンズ／大塚製薬（株）

8. 結果

最強リーグ

優勝：K. V. H.（児玉啓海：法2）

準優勝：チームYO!様

（河合敦史：商4）

第3位：KVC（広中純：文4）

第4位：K. V. A.（宮澤剛史：商2）

一般リーグ

優勝：チーム「T20」さん

（篤海慶：経4）

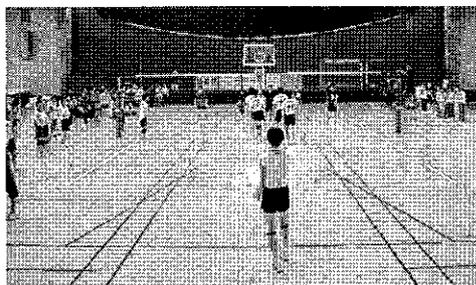
準優勝：KYONG（三枝宏樹：理工4）

9. コメント：大会には申込みの先着順に最強リーグ16、一般リーグ25の計41チームが参加した。申込み期間中には合計91チームからの参加申込みがあり、大会の

人気があらわれた。

バレーボールサークルのメンバーや体育会の新人チームも参加した最強リーグは4チームの4ブロックに分かれて総当たり戦を行い、各ブロックの1位チームによる決勝トーナメントを行った。また、一般リーグでは4・4・4・4・4・5チームの6ブロックに分かれ総当たり戦を行い、各ブロックの1位チームにより決勝トーナメントを行った。

さらに多数の新入部員を迎え迫力を増したユニコーンズによるソングリーディングが披露された。その他サーブ的当てゲームも行い、選手・企画者・観客が一体となって楽しんだ大会となった。



3) 塾長杯バスケットボール大会

1. 開催日：平成16年11月7日（日）
2. 会場：湘南藤沢キャンパス体育館
3. 開催時間：10:00～16:00
4. 参加チーム数：24チーム（最強リーグ12、エンジョイリーグ12）
5. 登録選手数：約250名
6. ゲーム数：42ゲーム
7. 1チームのゲーム数：3ゲーム以上
8. 結果：

最強リーグ

優勝：理工体1年（町田圭介：法1）

準優勝：エイスケーズ（八文字崇：経1）

エンジョイリーグ

優勝：Scratch（唐樋玲子：法2）

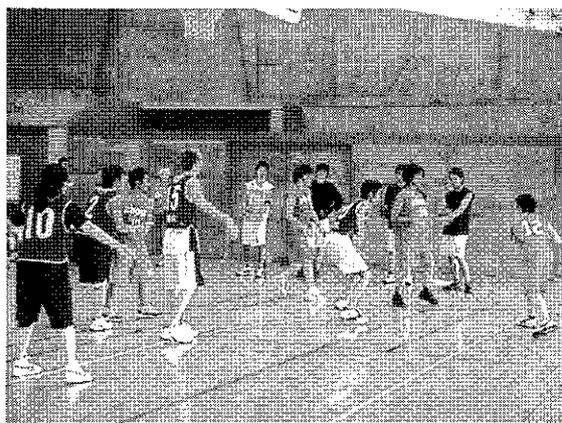
準優勝：Team JENGA

（楠井亮：理工1）

9. コメント：今大会は湘南藤沢キャンパスでの2度目の塾長杯、大会には最強リーグ12チーム、エンジョイリーグ12チームが参加し、男女混合チームや湘南藤沢キャンパスチーム、学部・キャンパスを越えたメンバー構成のチームなど多様なチームが揃い、大いに盛り上がった。

大会は4チームずつの総当りのリーグ戦により順位を決め、各ブロック1位と2位の3チームからじゃんけんにより1チームを決め4チームによる決勝トーナメントを行った。各チームにはゲームの

運営（得点板・タイマー）にも参加してもらい形となり、すべてのチームから積極的な協力を得られた。1点を争う白熱した好ゲームが多く見られ、やる側も見る側も存分に楽しめた大会であった。



4) 塾内卓球大会

1. 開催日：平成16年10月3日（日）
2. 会場：日吉卓球場（日吉記念館横体育館内）
3. 開催時間：8:45～17:15
4. 参加者数：延べ128名（最強卓球シングルス48名、最強卓球ダブルス20ペア、温泉ピンポンシングルス16名、温泉ピンポンダブルス12ペア）
5. ゲーム形式：予選リーグ：21点先取1セットマッチ、決勝トーナメント：11点先取3セットマッチ
6. 結果

最強卓球シングルス

- 優勝：佐々木孝治（理工）
- 第二位：北川雅幸（理工）
- 第三位：蔵谷俊克（文）

最強卓球ダブルス

- 優勝：北川雅幸（理工）・大坪由和（法）ペア
- 第二位：川崎寛海（塾員）・門鉄平（経）ペア
- 第三位：天川恭輔（理工院）・榊愛郎（理工）ペア

温泉卓球シングルス

- 優勝：神野律子（塾員）
- 第二位：榊芳二（塾員）
- 第三位：富樫優（環情）

温泉卓球ダブルス

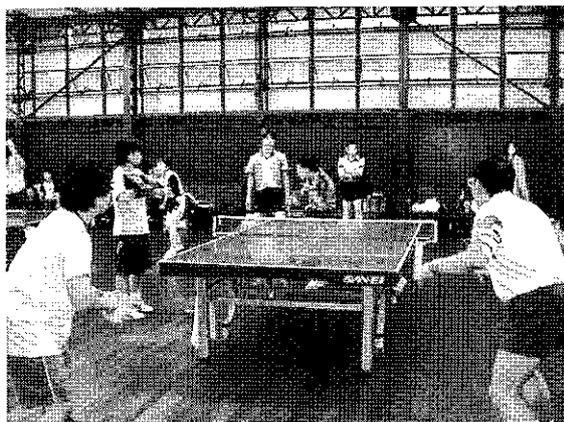
- 優勝：岩田陽之助（法）・東條裕一（法）ペア
- 第二位：若尾勇治（法）・櫃本裕規（法）ペア
- 第三位：本間郁朗（職員）・佐々木行信（職員）ペア

7. コメント：この大会は、「バレーボールやフットサル大会のように卓球の大会を開きましょう！」という塾生の声を受けて昨年度より始まった。二回目を迎えた今回は、塾高生から大学院生までの塾

生、教職員、すなわち塾員全体の参加する大会となった。

参加種目として今回より競技レベル別に参加できるように「最強卓球」・「温泉ピンポン」と2つに分け、そしてそれぞれの「シングルス」・「ダブルス」の計4種目にて大会を開催した。大会への申し込み段階では、延べ150名にも及ぶ参加があったが、当日の雨天により若干名の棄権があり、それでものべ128名が参加した。特に、昨年少なかった女子の参加者の増加により（女子延22名）、いずれの種目においても、楽しく熱い試合が繰り広げられた。

また、昨年度のシングルスチャンピオンである吉田武氏（体育研究所非常勤講師・体育会卓球部女子監督）が決勝トーナメント2回戦でまさかの敗退と言う波乱が起こり、非常に盛り上がった大会となった。



5) HIYOSHI AGE (HIYOSHI Art Gate Effects)

2004 Futsal Festa

1. 主催：HIYOSHI AGE 協議会
2. 協力：体育研究所
3. 開催日：平成16年10月11日（月）
4. 開催時間及び会場：10:00～14:00
@日吉陸上競技場
5. 参加申し込みチーム数：30チーム
（オーブンブロック22・ビギナーブロック8）
6. 参加料：¥5,000
7. フットサルクリニック講師：須田芳正
（体育研究所専任講師・元フットサル日本代表）
李宇諤（慶應義塾体育会サッカー部コーチ・元韓国代表）

※同月9日（土）11:00～18:00 @ミズノフットサルプラザ日吉においての予選実施後、11日に決勝リーグの予定であったが当日台風による悪天候のため予選を中止。そのため参加申し込み30チームのうち、参加希望15チーム（オーブンブロック10、ビギナーブロック5）がそれぞれ2、3試合を行った。また13:00～13:50には希望者に対してフットサルクリニックを開催した。

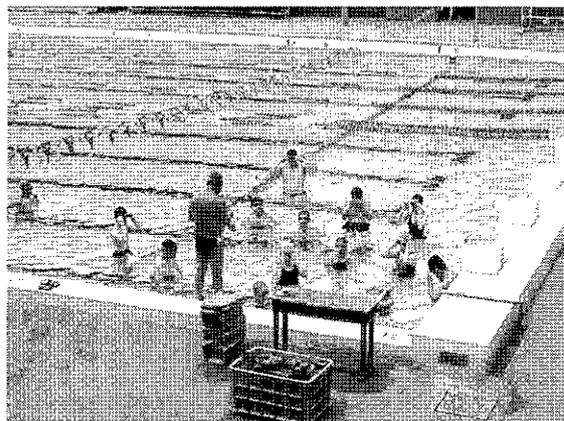
6) 第33回塾長杯・体育会理事杯争奪 蝮谷クロスカントリー大会

1. 主催：慶應義塾体育会
2. 協力：体育研究所
3. 開催日時：平成16年12月4日（土）
13:00開会式、14:00スタート（レース終了後、参加希望部対抗ミニサッカー大会を開催）
4. 場所：日吉陸上競技場蝮谷周辺
5. 参加者数：約413名（体育会部員355名、一般58名（高校生37名を含む））

2. 公開講座（他）

1) 中高年のための水泳教室

1. 期間：平成16年6月26日（土）～7月24日（土）、毎週土曜日 全5回
2. 時間：10:00～11:30
3. 会場：日吉プール
4. 講師：高嶺隆二（体育研究所教授）
5. 補助員：西村忍（同助手）・渡辺廉（商4）
6. 参加者数：15名（男性8名、女性7名）
7. 受講料：¥5,000
8. 総評：今年は記録的な猛暑の夏となり毎週のように晴天に恵まれた。その水泳日和の中、参加者は予定した講習時間（90分）を忘れて一生懸命に練習していた。その結果皆みごとなフォームで息継ぎもでき、30～50メートルを泳げるまでになった。



2) 健康ジョギング教室

1. 期間：平成16年10月18日(月)～11月12日(金) 全7回
(10/18月・22金・25月・29金・11/1月・5金・12金)
2. 時間：18:00～19:30
3. 会場：日吉陸上競技場及び体育研究所
1Fトレーニングルーム
4. 講師：松田雅之(体育研究所助教授)・瀬古利彦(S&B食品(株)陸上競技部監督、11/12のみ)
5. 補助員(ペースペーカー)：平田大輔・依田珠江・西村忍(体育研究所助手)
6. 参加者数：15名(男性7名、女性8名)
7. 受講料：¥4,000(教職員¥2,000)
8. 内容：毎回、トラックにて健康のためのウォーキングやジョギングの効果的な実践方法を解説した。またトレーニングルームにて簡単なウェイトトレーニングやエアロバイク、ダンベル等を使った健康・体力作りの方法をも解説した。最終回には、特別講師として瀬古利彦氏(元マラソン日本代表・SB食品陸上競技部監督)をお招きし楽しい時間を共有した。

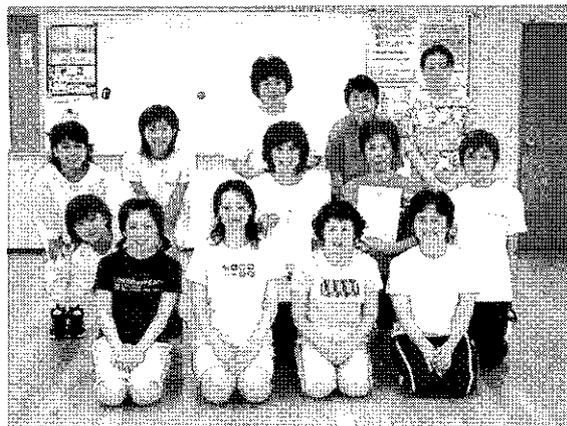
3) 健康エアロビクス教室

1. 期間：春—平成16年5月20日～7月8日 毎週木曜日 全8回
秋—平成16年10月28日～12月9日 毎週木曜日 全6回(11/18を除く)
2. 時間：17:30～18:30
3. 会場：体育研究所 3F エクササイズスタジオ
4. 講師：小林ゆい(体育研究所助手)
5. 参加者数：春22名、秋17名
6. 受講料：春¥4,000、秋¥3,000(テキスト料・保険料含)
7. コメント：これまでの2回の実施において、施設の広さに対して参加者数が若干多いように感じられたことから、今回

は実験的に応募定員を5名少なくした。その結果、より大きなスペースで動くことが出来、運動の指導内容に膨らみを持たせることが可能となった。

参加者の年齢には20～60代と幅がみられたが、年代が上がるにつれて日常的に運動習慣を持った方が参加される傾向がみられ、体力レベルに大きな差はみられなかった。逆に、本教室を2度、3度目に受講されているリピーター参加者と初参加者との間にエアロビクスダンスへの慣れによる差がみられた。しかし、回数を重ねるにつれてその差も縮まり、最終回では皆各自の体力レベルに合わせて運動を調節しながら動くことが出来ていた。

参加者22名中8名が塾教職員、14名が一般であったが、一般の中には卒業生のグループもあり、民間のスポーツクラブとはまた異なったほどよい連帯感を持って受講することが出来るのが参加者にとって魅力があるようだ。



4) 第19回「スキーのつどい」への講師派遣

1. 主催：慶應義塾大学学生総合センター「大学生生活懇談会」
2. 期間：平成17年2月7日(月)～10日(木)
3. 場所：新潟県南魚沼郡塩沢町石打丸山スキー場

4. 宿泊：ラ・ファミーユ中角

5. 引率教職員：鈴木千佳子（法学部）、
石手靖・依田珠江・平田大輔（体育研究
所）、川田孝征・木口由加里（三田およ
び矢上学生総合センター）

参加者数：13名（男子12名、女子1名）



3. 所内施設の開放

1) トレーニングルーム（1F）の開放

1. 期間：平成16年4/15～22、5/6～
7/14、9/27～12/22、平成17年1/6～
19
2. 曜日時間：月～金 15:00～18:00
3. 利用者数：

	塾生	教職員	合計
春学期	605	33	638
秋学期	390	23	413
年間	995	56	1,051

4. コンディショニングトレーナー担当者

2004 Conditioning Coach

MON 15:00 村松	TUE 15:00	WED 15:00 西村	THU 15:00 平田	FRI 15:00 石手
	Student staff			
16:30 小林		16:30 依田	16:30 野口	16:30 松田
	18:00			
18:00	18:00	18:00	18:00	18:00

2) エクササイズスタジオ（3F）の開放

使用団体：

ボクシング愛好会 週2回

16:30～18:00通年

ダンスサークル SIG 週1～2回

春学期

チア&ソングリーディング UNICORNS

週1回 秋学期

以上

IV. 業務活動記錄

平成16年度総務分野関係報告

1 人事（専任所員）

(1) 就任

西村 忍君（助手（嘱託））

（平成16年4月1日付）

(2) 昇格

植田史生君（教授）

綿田博人君（教授）

石手 靖君（助教授）

村山光義君（助教授）

須田芳正君（専任講師）

（以上、平成16年4月1日付）

(3) 退職

森田（小林）ゆい君（助手（嘱託））

（平成17年3月31日付）

(4) 任期満了

平田大輔君（助手（嘱託））

依田珠江君（助手（嘱託））

（以上、平成17年3月31日付）

2 人事（主事の交代）

富山優一君から栗谷文治

（平成16年8月1日付）

3 塾内役職

(1) 教職員評議員 高嶺隆二君

（～平成16年10月31日）

(2) 大学寄宿舍舎監 近藤明彦君

(3) 大学教養研究センター副所長

近藤明彦君

(4) 大学教養研究センター所員

近藤明彦君、石手靖君、吉田泰将君、

加藤大仁君、野口和行君、村松憲君

(5) 日吉キャンパス公開講座運営委員会委員

近藤明彦君

(6) 日吉キャンパスカレンダー編集委員

野口和行君

(7) 極東証券寄附講座運営委員

近藤明彦君

(8) 日吉行事企画委員会（HAPP）委員

石手 靖君

(9) 日吉キャンパスイベント・ギャラリー

企画委員 石手靖君

4 研究所内役職の主なもの

(1) 所長 高嶺隆二君

(2) 副所長 近藤明彦君

(3) 学習指導主任 安藤勝英君

(4) 学習指導副主任

吉田泰将君、加藤大仁君

(5) 総務委員会委員長 綿田博人君

(6) 教育委員会委員長 安藤勝英君

(7) 研究委員会委員長 佐々木玲子君

(8) スポーツ振興委員会委員長

石手 靖君

5 特別研究期間

村山光義君

6 その他

3月1日、体育研究所内研究室から第4校舎K棟へ、高嶺隆二君、綿田博人君、吉田泰将君、須田芳正君の4名の研究室が移転した。

（文責主事）

平成17年度活動報告書

平成17年7月15日発行

[非売品]

編集：活動報告書編集委員会

松田 雅之（委員長）

山内 賢（副委員長）

綿田 博人（副委員長）

石手 靖 牛山 潤一 加藤 幸司

清水 静代 野口 和行 村山 光義

発行：慶應義塾大学体育研究所

〒223-8521 横浜市港北区日吉4-1-1

制作：(有)梅沢印刷所

〒108-8345 東京都港区三田2-15-45

